Episode Myself - Persona3

そうじ たかひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ｍｙｓｅｌｆ　－　Ｐｅｒｓｏｎａ３

【Ｎコード】
Ｎ１６６６Ｉ

【作者名】
そうじ　たかひろ

【あらすじ】
２０１０年１月３１日。死の概念の目覚め。それは生きとし生けるもの全てが死する事を意味する。やってくる結末は確実で。けれど不可避ではなかった。
奇跡を起こしたのは十七才の少年。自らを封印のくびきに投じた彼は命ある世界と引き換えに、死の欲動や悪意をその身に浴び続ける事になる。
『彼に会いたい』――きっかけはそれだけ。けれどその思いは強

く、輝きを忘れなかった。
『彼を助けたい』――再び灯った希望。照らされた道。零以上の可能性。奇跡をもう一度起こす為、少女達は走り出す。

†　◇　†　◇　†

アトラスから発売されたＰＳ２用ソフト「ペルソナ３」の二次創作小説です。後日談の後の話。囚われた主人公を救う為、エリザベス、岳羽ゆかり、アイギス、山岸風花、特別課外活動部のメンバーが走り出す。ＦＥＳでＰ３は終わらせない。

設定協力　スリーＳ氏

００１：物語は兆す（前書き）

アトラスから発売されたＰＳ２用ソフト「ペルソナ３」の二次創作小説です。
後日談の後の話。ペルソナ３核心部分の多くが書かれておりますので、ご注意くださいませ。

００１：物語は兆す

夢と現実、精神と物質の間（はざま）にある部屋。この深い青一色の部屋には書庫があった。何十万冊あるのだろうか。書庫も同じく深い青をした部屋で、見上げる程高い本棚が壁に沿うようにある。

部屋の中央にはすらりと伸びる猫足の机が一つ。同じ意匠のイスが三脚。テーブルの上には十冊以上の本と沢山の黄色い栞が置かれ、一脚のイスは引かれたままであった。

この部屋と同じ深い青の衣装をまとうマーガレットは、出しっぱなしにされている本を前に小さなため息を一つつき、引かれてあったイスに腰かける。

一番上に積まれてある焦げ茶色した表紙の本を手に取り、栞がはさまれてあるページに視線を走らせた。どうやら地球と死の概念についてのようだった。概要はこうだ。

原初の昔、地球上の生命体は無限の命をその身に宿していた。死ぬことがない生命体は絶える危険が無いゆえに子孫を作る必要もなかった。

だが、無限の命は空からやって来たモノによって唐突に終わりを迎える。

宇宙より降り注いだモノの名はニュクス。死の概念そのものの存在。

地球へと飛来したニュクスは勢いを弱める事なく地表へと衝突し、地球の全てにニュクスの波動が迸る。地球上の生命体全てがこの先、死を決定づけられた瞬間であり、全ての生命が死へと向かって歩み出した瞬間だった。

ニュクスは死の運命を組み込んだだけではなく、今すぐ死の運命が具現するようその身を震わせた。

死を突然突きつけられた地球上の生命体。だけど怯える事はなか

った。まだ感情を持つ程には進化を遂げていなかったからだ。けれど本能的な生へ欲求は凄まじかった。
地球上の生命体は死という概念に徹底的に抵抗した。そして、ついにニュクスの物理的存在は月へ、精神的存在は集合的無意識の中へと追いやり、封じ込める。
後に残ったのは、いつかは死ぬ事が決まった『死の概念』と、真っ暗な空に浮かぶ『月』だった。
読み終えたマーガレットは思う。
死の概念がない。無限の命。子孫を作らない。一体この生物は何を食していたのだろう。食べられた生物にも無限の命があったのだろうか。本を閉じる音と扉が開く音が重なった。
「こんなところにいらっしゃったのですか。お姉様」
それはこちらの台詞だ。マーガレットは書庫に入ってきた、十中八九テーブルの上に本を置きっぱなしにした人物であろう妹エリザベスに、まずは読んだ本を直すように言おうとした。だが、その表情を見て言葉に詰まった。
艶やかな銀の髪。黄金色の瞳は静かに意志という光を灯し、淡い桃色がのった形の良い唇はきゅっと閉じられていた。どこか浮世離れしたというか、いつも超然とした妹なのだが様子が少し違う。こんな時は決まって素っ頓狂な事を言い出すのだ。またか、と思いながらもマーガレットは詰まった言葉を続けた。
「エリザベス。まずは本を片付けなさい」
エリザベスも心得ているのだろう。本を直さない限りこの姉が話を聞く事がないという事を。マーガレットから本を受け取り、はさんであった白銀細工の栞を大切そうに懐にしまうと、テーブルの上にあった本を棚へと戻していく。
マーガレットは妹の背中を見ながら思う。今度は何を言い出すのだろうと。
かつてエリザベスは、二人の主であるイゴールの応接間をクラブのようにしたいと言いだした時があった。ミラーボールで飾り付け、

大音量で音楽を鳴らしながら踊るのだそうだ。鉄棒を置きたいと言いだした事もある。恐らくどれも我が主の客人だったあの男の影響だろう。

腹立たしい。腹の奥底に鈍い熱さを持つ感情を抑えながら、妹が片付け終えるのをマーガレットは紅茶を淹れながら待った。

「お姉様。私は外の世界に出ようと思います」

静かな時の流れの中、本を片付け終えた“力”を管理する妹エリザベスは、“力”を統べる姉マーガレットに唐突に告げた。

「なんですって？」

マーガレットは真っ白なティーカップを乱暴にソーサーへ置くと、ゆるやかなウェーブが掛かった金髪を震わせ、切れ長の目を大きく開き、とんでもない事をさらりと言ったエリザベスの顔を見る。

ある程度予想はしていたがそれでもこの言葉はあまりにも型破り過ぎる。ありえないと言っても良かった。

「この世界の果てに、自らを封印のくびきに投じた一人の少年の魂が眠っています。命の輝きを見失ってしまった人々が世界を自滅へと誘うのを、その身を挺して護っているのです。私はあの方を救いに行こうと思います」

左手を自らの胸に当て、姉と同じ深い青の衣装で身を包む妹は淡々と語る。いつも持っているはずのとても厚い本はどちらの手にも見当たらなかった。

「世界の果て？　封印？　あなた何を言っているの？」

やはりあの男の事かという思いと、突拍子もない内容にマーガレットは瞬（またた）く間に不機嫌になってゆく。苛立ちを視線に乗せエリザベスを睨む。空気が、震える。

「もし私一人で無理なら、あの方の魂と絆を結んだ方たちのお力をお借りします。あの方達は本当に奇跡を起こすのです」

「お待ちなさいエリザベス！　そんな事が許されるとでも思っているの！」

ここで止めなければ妹は本当に出ていく。それは“住人”にとって許されない事だ。マーガレットはついに立ち上がり、凍てつくような冷たさと射殺さんばかりの鋭い視線をエリザベスへと突き刺す。一切容赦はない。だが、エリザベスは怯むことなくゆっくり目を閉じ、静かに力強く言葉を紡いだ。

「私はあの方に“実感”をいただきました。“答え”をいただきました。とても大事な物をいただきました。私はあの方をお助けしたいのです」

言い終わったエリザベスの双眸からは揺るぎない決意の光が見える。銀色の髪がさらりと揺れた。

「……待ちなさい！」

一瞬とはいえ妹に気圧された。マーガレットにとって初めての事だ。それでも刹那といってなんら差し支えのない一瞬だ。すぐさま立ち返ると気力を漲らせる。怒りほとばしる低い声。限界まで緊張を孕んだ空気は真っ白のティーカップをカタカタと震わせる。けれどエリザベスは歩みを止めない。

切れ長の目はいっそう細く鋭くなってゆく。突き刺す空気。小さな音と共に耐え切れなくなったカップは二つに割れた。ソーサーの上には紅い溜まりが出来ていく。

「お姉様、どうぞお達者で」

扉の前で立ち止まり、マーガレットに深々と礼をするエリザベス。やがて小さな背中は眩い光の中へと消えていった。

†◇†◇†

バスルームに響く水の音。

シャワーヘッドから勢い良く落ちてくる湯は、首筋から緩やかなふくらみをみせる胸元へと伝い、すらりと引き締まった足へと流がれる。跳ねた湯は肌に乗ると同時に玉となりするりと落ちて行く。

岳羽ゆかりは鼻歌まじりにシャワーを浴びていた。

漆黒の瞳。整った鼻筋。可愛らしくも艶めかしい薄桃色の唇。濡れる栗色の髪は肩より長く、水を弾く肌はきめ細かく美しい。高校時代の彼女を知る者なら口を揃えてこう言うだろう。ますますきれいになったと。

この春より大学二年生となったゆかりは、三ヶ月前に同居人と共にここに越してきた。大通りから一本入った住宅街にある、パッと見た感じは学生向けのハイツ。だが、実態は少々外観と異なった。

一階部分は大きな会議室となっており、二階はゆかりと同居人が住んでいる２ＬＤＫが一室。１ＬＤＫが四室。もっとも、その四室とも空室なので実質このハイツに住んでいるのはゆかりと同居人だけだ。

室内のクオリティはかなりのもので、ハイツのそれではない。部屋の壁は厚く、普通の生活をしている限り音や声が隣に漏れることはないだろう。当然トイレ、洗面台、浴室は独立しており、いわゆる三点ユニットではない。

今もそれなりに足が延ばせる程度に広い浴槽には七分ほど湯がはられていて、湯気とシャンプーの甘い香りが小さなバスルーム一杯に広がっていた。

白い素肌を覆っていた泡を全て流し終えたゆかりは、シャワーを頭から浴びようと少し前に寄り屈もうとした。その時だ。

突然、勢い良く噴出していた湯が止まった。バスルームを照らしていた照明が光を失う。

ゆかりはあわてて壁にかけてある時計を見る。針は午後１１時５５分２３秒を指してぴたりと止まっていた。

お湯が滴り落ちる音しかなかったシャワールームに大きなため息が響く。

いつも五分ほど遅れている時計を見ながら、ゆかりはまだ洗い流していない自分の髪を触り、もう一度大きなため息をついた。

「油断したなぁ」

諦めたゆかりは手探りで水量ハンドルを『止める』へ回し、肩ま

で浴槽に浸かると後悔混じりにつぶやいた。
愛用のシャンプーがどこにあるのか見えない程、窓がない小さなバスルームは暗闇だった。
だが、突然湯が止まり照明が消えたにも関わらずゆかりに一切焦りはない。むしろ、肩口まである栗色の髪を濡らしているトリートメントをどう流そうかと悩む程度に余裕があった。
影時間。
聞き慣れないこの言葉が、今起こっている現象である。
月に数日、深夜〇時から数時間、あたりは深く黒い青緑色に包まれ、空から落ちてくる禍々しい黄の光が辺りを照らし出す。
だが、この異様はほとんどの人に知られていない。より正確に言うと、ほとんどの命あるものは気付いていない。
なぜなら、影時間を体感できないからだ。
影時間を体感出来るのは適正ある者、もしくは異形のどちらか。適正の無い人間は影時間のあいだ『象徴化』と呼ばれる柩型の大きな結晶に変化し、それは影時間が明けるまで続く。象徴化している間の記憶は全くない。
それは何も人に限った事ではない。象徴化こそしないが、命あるものは全て止まる。機械も止まる。そして時が秒を刻む事すら止まる。
適正無き者にとっては無いも同然の時間。機械も、人も、時も止まる沈黙の世界。それが影時間。
深夜0時丁度から影時間が始まる事は分かっているが、満月の日を除き、どの日に影時間が起こるかは分からない。かつては毎日影時間が訪れていたのだが、二年前からは月に一回。多くても二回程度だ。
まさか今日影時間がくるとは。ゆかりは原因が分っているから焦りはなく、浴槽の中ただただ己の迂闊さを悔いていた。
これから少なくとも一時間近く影時間が続く。真っ暗なバスルーム。少しぬるくなってきた浴槽の中で、どうしたものかとゆかりは

目を閉じた。
頭に浮かんできたのは大学二年になった事。かなりしつこくサークルの勧誘を受けた事。少し胸が大きくなった事。将来の事。昔の事。
ふと脳裏に一人の男が過ぎる。
影時間の中、禍々しい光を放つ月を背に遠い目をした少年。
「湊君……。世界を幸せにするなんて、私にはムリだよ……」
膝を曲げ、両手で自分を抱かかこみながら、ゆかりは力なくつぶやいた。

＞i２８６５７―２８７２＜

「音の停止確認。光の停止確認。時の停止確認。黄昏の羽、起動。影時間モードへの起動シークエンス、一から三十二までオールクリア。影時間モードへの移行完了を確認しました」
外の景色が暗闇から黒い青緑色に包まれた瞬間、家路へと急ぐサラリーマンは突如巨大な柩のオブジェと化した。道路にはわいて出てきたかのように血のような赤い水溜まりがあちこちに点在している。
稲架（はざのまし）の間市にあるハイツの一室。窓からその様子を見ていたアイギスの蒼い目は、小さな駆動音を発しながらせわしなくピントを合わせていた。
かつて対シャドウ特別制圧兵装七式と呼ばれた機械の乙女。シャドウと呼ばれる異形を制圧する為に、桐条財閥の研究グループが十年以上前に作り出した人型兵器。紆余曲折、運命と偶然と奇跡が幾重にも連なり、今はこうしてゆかりと同居をしながら与えられた役目を全うしている。
見た目は二十代の女性。左右対称完全なる均整がとれた顔立ち。

柔らかな金髪と蒼い目を持つ外国人風の美人だ。街を歩けば振り向かない男はほとんどいない。ゆかりと同じく大学内では知らない者はいない有名人だ。
機械の乙女アイギスは心を持っている。感情もある。今の科学技術ではありえない存在であり、故に思い悩む。
人の定義。機械の定義。その狭間を歩む存在。
アイギスは影時間モードへの移行完了を確認すると、まずバスルームにいる同居人、ゆかりの身を案じた。
バスルームは真っ暗なはずだ。このままではままならないだろうと明かりを探すのだが、あいにく影時間に明かりを灯す事が出来る物はこの家には見当たらなかった。
「新聞紙を燃やす……は、だめですよね」
明かりがなければ何かを燃やせばいいじゃない。
ある意味もっともだが実行に移すとなると様々な問題を孕む解決策第一候補を却下し、次善の策を検証しようとした時、警告音（アラート）が割り込んだ。
アイギスにとって、護るべき対象であるゆかりの危機解決より優先順位が上位の警告。
「シャドウ反応？」
アイギスの中で黒地に緑のマップが表示され、ある地点が丸で囲まれる。その右側に次々と表示されてゆく情報。さらに警告音が割り込む。
「人間が襲われている！？」
マップの中央上部。黒地に赤く『Ａｔｔａｃｋ』と表示され、明滅を繰り返す。それはゆかりが脱衣所から出てきたのとほぼ同時だった。
「ちょうどよかった。ゆかりさん！　シャドウ反応を感知しました。行きましょう」
「え？　シャドウ？　私シャワーから出たばっかなんだけど。眉どころか化粧水もまだつけてないし。つか、上なんてまだＴシャツ一

枚で……」
「おそらく人間が襲われています」
さえぎるように交わされたアイギスの言葉に、ゆかりの目の色は戦士のそれに変わってゆく。
テーブルの上にあった化粧水を手に取り乱暴に叩きつけ、まだ乾いていない髪を後で一つにまとめて垂らす。化粧を落とした時用の伊達めがねとピンクのパーカーをひっつかむ。
開かれたドアの先、岳羽ゆかりとアイギスは深く黒い青緑色の世界へと、吸い込まれるように飛び込んで行った。

ある会社で働く四十代独身の新入社員指導係は悩んでいた。
毎年四月には新入社員がやってくる。親に何百万も出してもらい大学をめでたく卒業した連中だ。
指導し始めて早一ヶ月。これがまた言う事を聞かない。
どんなに新入社員が屁理屈をこねたって、先輩が新入社員にする注意は正しいのだ。新入社員もいつか指導する立場となった時に気が付くだろう。
だけどこの男は一つ大きな見落としをしていた。自分の指導方法や物言いにも問題があるとはまったく考えていなかったのだ。
すっかり遅くなった会社からの帰り道。今日も予定していた指導過程が終わらず、自分が担当しているグループだけがどんどん遅れていく。ハズレを引いたとむしゃくしゃする思いもろとも飲み干すかのように缶ビールを傾けていた時だ。
突然世界が暗転した。
それだけではない。あちこちにまるで血のような水溜りが現れ、前を歩いていたサラリーマンがいきなり二メートル程の柩に変化する。男は反射的に後ろを見る。目に飛び込んで来たのは、住宅街のど真ん中に立つ四つの黒い柩。映画で見たことのあるドラキュラが

眠っていそうな西洋風の柩が鎮座している。
「な、なんだこれは」
持っていた缶ビールが地面に落ちた音が響く。半分以上残っていたビールがゆっくり地面に広がっていく。
全く状況を飲み込めないまま、次なる混乱と恐怖が男の心臓を力任せに握る。
地面から黒い影がにじみ出る。それは膨れ上がり形となっていき、ついには人型らしきなにかとなってふらふらと揺れた。
男の右から一体。左から五体。正面に三体。後ろに二体。正面にいた影はゆっくり男に近づくと、ずずず、と右手を伸ばし男に触れようとする。
男は近づいて来る手を見て思わず叫びそうになった。
よく見たら手ではなく、四十本ほどのうねうねとうごめく触手が集まりだったからだ。
恐怖は頂点に達した。世界は暗い緑色に染まり、周りには不気味な柩。男に近づいて来るのは触手を持つ人型の影。異形。
ただただこの場から逃げ出したい。だが、足が動かない。
後ずさる男の背に柔らかな感触が走る。右肩にうごめくなにかを感じる。正面の触手は男の顔面を撫で、掴もうとした。
ああ、もうだめだ。男は諦めた。

「掃射っ！」
突然、男の目の前に閃光のごとく現れた黄金色揺れる碧眼の女。
響く銃撃音。右手から赤い光が走るたび、黒い影は霧散してゆく。闇夜を彩るマズルファイヤは、どうやら彼女の指先から放たれているらしい。
目で追うことすら困難な速さで移動し続ける女。切り返しの際に生じるアスファルトのへこみだけが彼女の存在をしっかり受け止めていた。
「離れろっつのっ！」

疾風のごとく現れた栗色のポニーテール舞う女。
流れるような動きで影に近づくと、ピンクのパーカーと後ろにまとめた髪を揺らし、すらりと長い右足で弧を描く。彼女の足甲は男の近くにいた異形の首を捉え、打ち抜いた。
なおも彼女の攻撃は止まらない。
霧散する異形の隣、男を襲うとしている異形に左拳を二つ重ね、鋭く一歩踏み込むと右拳でえぐる。異形が霧散するや、放った右拳を鋭く引き、腰をぐっと落とす。踏み込む右足。放たれる右掌底。
重力を無視したかのようにふっ飛ばされた異形は、後ろにいた残り五体の異形たちを巻き込み倒れて行く。一箇所にまとめられた形だ。
「これで終わりです！」
碧眼の女性の指先から再び赤光がほとばしる。異形に一切の行動を許さない。
圧倒的なまでの力の差を見せつけ、あれだけいた異形は女性二人の登場からわずか数分で文字通り霧散した。
安堵する間もなく男は激しい目眩に襲われる。ぐらぐらと揺れる視界。立っている事が出来ず崩れるように座り込む。景色がどんどん霞むなか、最後に見えたのは残心解かぬ二人の背中だった。

００１：物語は兆す（後書き）

こんにちは、そうじたかひろです。

この度はＥｐｉｓｏｄｅ　Ｍｙｓｅｌｆ　－　Ｐｅｒｓｏｎａ３
００１：物語は兆す　をお読みくださりありがとうございました。

色々とありまして第一部を取り下げ、先に第三部を投稿する事になりました。今まで第一部をお読みくださった皆様、本当に申し訳ありません。
引き続き第三部をお楽しみいただけましたら幸いでございます。

また、絵を描いてくださったヨウ子様に感謝申しあげます。
現在ツイッターのアイコンで使っている画像でもあるのですが、どんな絵が良いですか？　とのお言葉に、かっこいい湊をお願いしますとお願いしたところ、こんなにかっこいい湊をくださいました。
本当にありがとうございました。

設定に多大な協力、助言くださった　スリーＳ氏。
文字入れをしてくださった　いき♂氏。
色々と相談に乗ってくださった　ぬじまき氏。
そしてお読みくださった皆様へ感謝しつつ。

それでは湊を救うまで、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

００２：鳴動する心

地球史として、これまでに地球上の生命体が大きな絶滅の危機に瀕した事が五回あるとされる。

第一は約四億三五〇〇万年前のオルドビス紀末。超新星爆発によるガンマ線バーストで、生物種の実に八十五％が滅んだという。

第二は約三億六〇〇〇万年前のデボン紀後期。繰り返された大規模環境変化により、生物種の八十二％が滅んだらしい。

第三は約二億五〇〇〇万年前のペルム紀末。地球の歴史上最大の大量絶滅。大規模な火山活動と化学反応による著しい酸素濃度低下。結果、生物種の実に九十％以上が滅びさったとされる。

第四は約二億一二〇〇万年前の三畳紀末。活発な火山活動が原因とされ、七十六％が絶滅。

第五は恐竜が絶滅した事でも有名な約六五〇〇万年前の白亜紀末。小惑星が地球に衝突したとされ、七十％が絶滅した。

地質時代区分で完新世（かんしんせい）と呼ばれる現代。既に第六の大量絶滅が始まっているとする生物学者は少なくない。過去の第一から第五とは違い、自然災害ではなく現生人類が引き起こしている環境破壊が大量絶滅の理由となっている。

だが、それとは別に第六の大量絶滅は、二〇一〇年一月三十一日にあとわずかで現実の物となっていた。

人類滅亡の危機ではない。地球上の生命体絶滅の危機。人類は皆その場に居合わせていたのだが、ほとんどの者はその記憶を維持する事が出来なかった。なぜなら影時間にそれは起きたからだ。

宣告者の復活。そして原初の昔、地球上の生命体に死の概念をもたらせたニュクスの目覚め。立ち向かったのはペルソナと呼ばれる力に目覚めたわずか八人と一匹。

死の概念そのものであるニュクスに勝利する事は決して叶わない。

死の概念に勝つと言う事は、死を克服するという事だ。それは全生命体から死の概念を取り去る事を意味する。
立ち向かった八人のうち一人――　有里　湊が出した答えはニュクスの封印だった。
月と同じ大きさであるニュクスを封印するという奇跡を有里　湊は命の答えに至る事により成し遂げる。第六の大量絶滅はこうして未然に防がれた。

†◇†◇†

目覚ましが鳴る五分前に目が覚めるゆかりにとって、目覚ましが鳴るまでの五分間は今日一日の予定を朧げに考える時間になっている。
ベッドから起きて、コップ一杯の水を飲むと弁当を作り、その残りを朝食として食べる。それからシャワーを浴びるのがいつものパターンだ。
高校時代と大学時代における朝の準備最大の違い。それは化粧をする事。大学入学の頃はやたらと時間がかかったものだが今では二十分ほどでメイクは完了する。
弁当兼朝食はアイギスと交代で作る事になっており、月水金はゆかりの番。火木土はアイギスと決めてある。もっとも、アイギスは食事の必要がないので作るのはいつもゆかりの分だけだった。単に料理というスキルを習得したいというアイギスの希望により、交代制になっているにすぎない。
ゆかりとアイギスの共同生活は実に順調で、そしてゆかりの大学生活も実に順調だった。
大学の課題には随分と悩まされているが、締め切り前夜までにはきちんと終わらせている。講義も全て出席。一度寝坊して遅刻した事があるだけだ。将来どうしたいかも決まっていて、その為の資格を取る勉強もしている。

客観的にみると真面目な生徒。教授陣からの評価も良い。正しい大学生の姿の一つだろう。
だけど何かが違う。なにかが足りていない。充実感がないとゆかりは常々感じていた。別に勉強ばかりしているわけでもない。アイギスや大学で知り合った女友達と楽しく遊んでいる。そのような問題ではない事はゆかり自身も分っていた。

今日の大学の講義は午前中の二コマで終わり、バイトも予定も入っていないゆかりは、アイギスと久しぶりに組み手をしようと考えていた。
ゆかりは高校時代、弓道部だった。腕はインターハイに出場できる程で、その技とペルソナという能力を駆使し夜な夜なシャドウと戦っていた。大学に入っても弓道部の門を叩き、毎日ではないが弓をひいている。
ではなぜ組み手なのか。
湊を失ったゆかりは分り易い強さを求めた。不安をとにかく薄めたかった。身体的に強くなると心も強くなる気がしたのだ。もちろんそれだけではない。高校三年生の時は勉強に打ち込むことで、そして大学に入ってからは体を動かすことで寂しさを紛らわせていた面もある。前向きに生きようと決心はしたものの、そう簡単な話ではなかった。
対シャドウ特別制圧兵装であるアイギスは格闘技も心得ており、機会を見つけては手解きを受けていた。高校二年の命をかけた実戦経験と元来の運動神経、そして強くなりたいという一心にアイギスの的確な指導。アイギスとシャドウ以外に試した事はないが、今では空手の段持ちと相対しても遜色ない実力になっている。
アイギスは午後からもう一コマ授業があるので、ゆかりは帰る準備を手早く済ませ正門へと向かう。もうすぐ梅雨の時期なのだが今日の日差しは色薄く、妙な肌寒さが残っていた。授業を終えた学生が、皆思い思いに午前最後のひとときを過ごしている。

ちらちらと見られている事にゆかりは気が付いていたが、ここで歩を止め、話をすると帰られなくなる事が分かっているので気付かない振りをする。

大学入学当時、話し掛けられる度にきちんと応対していたのだが、高校生と違って大学生は皆強引だった。行かないと言ってもゆかりの手を引っ張り、「ちょっとだけでいいから」と言いながらどこかに連れて行こうとする。その度にアイギスが間に入るという事がたびたびあった。

さすがに一年もすれば心に余裕も生まれ、全ての男性が怖いと思うことも一人では断りきれないという事もなくなった。だけど無用なトラブルを避けるため、必要が無い限り立ち止まらないようにしている。

正門に着いたところで人だかりが見えた。芸能人か誰か来ているのだろうか。人だかりを構成しているほとんどが男である事から、多分女性なんだろうな、とゆかりは考える。

どちらにしても自分とは関係ない。そう判断したゆかりは人だかりを避けるように足早に校門を抜けようとした。

「岳羽様」

「え？」

人だかりが割れる。ゆかりと人だかりの中心にいた人物との間に遮る者はいなくなり、お互いにその姿を確認した。

「お久しぶりでございます」

「あなたは……」

人だかりの中心にいた人物はゆかりの姿を見つけるや深々とお辞儀し、有里　湊の事で話があるという、ゆかりがこの世でもっとも断らない方法でアプローチしてきた。

有里　湊。高校二年の一学期に私立月光館学園高等部二年Ｆ組に

きた転校生。
登校初日に学園の有名人、ゆかりと一緒に登校してきた事で、学内裏掲示板にスレを乱立させるほどの凄まじい注目を集めるが、それ以外はあまりパッとしない物静かな生徒というのが当初の印象だった。
まず注目されたのは勉強から。一学期の中間考査で学年二十位以内にランクインし、続く一学期期末考査で学年一位に輝く。
同じ時期、運動面でも注目され始める。夏休みに行われた高等学校水泳競技大会明王杯地区大会では、入部五ヶ月目＝競泳歴五ヶ月目にして一〇〇m自由形二位の成績を残した。
芸術面でもその才能を遺憾無く発揮している。水泳部と掛け持ちで入部している写真部で出品した作品。近年稀に見る傑作揃いうたわれた展覧会で、部長の平賀と共に金賞を受賞した。
生徒会からも会長直々の指名により迎えられ、いつの間にか男女どちらからも人気のある、学園でも目立つ存在になっていた。
女子との噂も多かった。決して女の子をとっかえひっかえというダーティな印象はないのだが、ゆかりを初め、この子と仲が良い、付き合っているのではないかという噂は絶えなかった。
噂の中でも有名だったものの一つ、大人しく気弱そうな、眼鏡と流れるような長い髪が印象的な美人の一年生生徒会会計との噂がある。
次に噂になったのは健康的に日焼けした元気な二年生水泳部マネージャー。
同時期、有里　湊やゆかりと同じ寮に住む、隠れファンが多い写真部二年生の山岸風花との噂も流れた。
皆が度肝を抜かれたのは、寮生であり、月光館学園高等部生徒会長にして桐条財閥頭首の一人娘、三年生の桐条美鶴との噂が立った時だ。学年一位の成績。フェンシング部に所属し全国大会三連覇。近寄る事すら躊躇(ためら)う美貌と気品は、日本有数の財閥である桐条家そのものであり、月光館学園に在籍する者で桐条　美鶴の名を知らぬ

者は一人もいない。そんな桐条との噂に誰もが驚いたが、同時に有里　湊なら有りうるな、と思った。
もちろん男子生徒とも幅広く交流があった。むしろ男子生徒との交流の方が活発だった。
クラスメイトや水泳部、写真部を初め、融通の全くきかない堅物で有名だった風紀委員長。フランス人留学生。数え上げれば枚挙にいとまがない。それでも印象は女子との噂に傾く。それだけセンセーショナルだったのだ。
だが、これらはいわゆる表の顔だ。有里　湊にはもう一つの顔があった。
特別課外活動部。通称S．E．E．S。私立月光館学園巌戸台分寮に住む寮生で構成された、対シャドウ対策及びタルタロス探索部隊。桐条を筆頭にゆかりやアイギス、山岸を含む、合計八名と一匹で構成された異能操る集団で、現場リーダーを務めたのが有里　湊だった。
その戦闘力は圧巻で、通常一人ひとつしか使えないはずのペルソナという異能を、有里　湊は十以上操るという過去に例を見ない規格外の力をみせる。武器を手に取れば達人ともいえる冴えを見せ、常に冷静沈着な判断と指示で特別課外活動部を勝利へと導いた。
文武両道。風流才子。才能はあるのだろうがそれ以上に努力の人。そしてゆかりが唯一心を許した男。それが有里　湊。
彼は自らの命と引き替えにニュクスを封印をし、仲間との約束を果たした後、この世を去った。
決定済みの偶然か。幸（さいわ）いなる不幸か。それとも前に進めと背中を押す痛みある親愛なのか。ゆかりたち七名と一匹はその後、なぜ彼が死ななければならなかったかを知る機会に巡り合う。二〇一〇年三月の事だ。その時に初めてゆかりはゆかりの前に座っている人物と出会った。
今回で二度目。
場所は大学近くの落ち着いた雰囲気の喫茶店。フードメニューは

サンドイッチとパンケーキしかないが、コーヒーならグァテマラ産の豆を初め、各国自慢の豆からこだわりのオリジナルブレンドなど数十種類がメニューに名を連ねる硬派な喫茶店だ。
静かなＢＧＭが流れる店内には数組の客がいて、コーヒーの香りと苦味を楽しんでいる。ゆかりたちは店内のちょうど中央辺りに席を取った。
落ち着いて自分と正対する人物を観察するゆかり。ちょっと変わった柄の深い青のワンピースを着た外国人風の女性は、背筋を伸ばし美しく座っている。髪は綺麗な銀髪でショートカット。美人だ。どこか現実味のない独特の雰囲気を纏っており、一般人で無い事は容易に予想できた。
頼んだコーヒーをマスターが持って来てくれた頃、ゆかりはかつて聞いた噂が彼女についてのものだったのかと思い至る。
ポロニアンモールで有里　湊と楽しげに歩いていた、青い服を着た女性がいたという噂。
巌戸台商店街で有里　湊と仲よさ気に食べ歩きをしている青い帽子をかぶった女性がいたという噂。
長鳴神社の奥へ、有里　湊と外国人風の女性が消えていったという噂。
月光館学園高等部校舎内を有里　湊と銀髪の女性が仲睦まじく歩いていたという噂。
この女だ。疑う余地なくこの女だ。噂に出て来た女性の正体は目の前の女だ。ならばこの女が話し掛けて来た理由は必然的に絞られる。
ゆかりは負けない、退かない、譲らないと心の中で固く決意し、まるで恋人の浮気相手と今から一戦交えるかのような気分で話に臨んだ。
「で、話ってなんですか」
「改めまして。わたくし、エリザベスと申します。事前のお約束も無く突然の訪問、大変失礼いたしました。実は岳羽様に折り入って

お願いがございまして、本日はお声をかけさせていただきました」
「いいですよ、約束なんてそんな事。それでなんでしょうか？」
さぁ、何がくる。あれから二年たったタイミングで有里　湊の話を持ち出す。決して小さな話題ではないはずだ。懐かしさからの思い出話の可能性から、実は二人は付き合っていたという最悪な可能性まで様々な事を想定し、ゆかりは驚かないよう、そして自らが傷つかないよう事前に保険をかける。エリザベスの小さな唇が開く。
「はい。実は私、あのお方……有里　湊様をお救いしたくこちらの世界へやってまいりました」
「はぁ！？　ちょ、何言ってんの！　助けるって……」
完全に予想外だった。店内に響くゆかりの声。ただでさえ目立っていた二人にさらに好奇の視線が殺到する。だが、ゆかりはそれどころではなかった。
この二年、何度考えたことか。ゆかりが見た最後の湊は、ニュクスを護るように両腕を広げ石化した姿。背はニュクスと融合し一体化していた。ゆかり自身もペルソナという異形の力を行使し、疾風や治癒の力を操る。だからこそ分かる。ニュクスの尋常ではない力が。人間では到底太刀打ち出来ない、圧倒的な力の差を。それは惑星と人間との力の差と言って差し支えが無いほどに開いていた。
「はい。湊様を助ける為、私は参りました」
ゆかりは次の言葉が出ない。先手を取られた事。己の小ささ。途轍もない敗北感が胸を蹴り飛ばす。エリザベスはゆかりのそんな心境などまったく気が付いていないようで、真摯な態度で話を続ける。
「私は様々な文献を調べました。来る日も来る日も調べました。そしてやっと見つけました。こちらの時間でいいますところのおよそ二ヶ月前、ついに一筋の光明を見つけたのでございます。ですが、それはとても弱い光。奇跡と言うのですらためらう程のか弱い光。そこで私は思いました。湊様と強い絆を持つあなた方と一緒なら、あるいはもう一度奇跡を起こす事も叶うかと」
前を向いてゆかりに話し掛けるエリザベス。うつむいてエリザベ

スの話を聞くゆかり。エリザベスはまだ諦めていなかった。その事実が大きく重くゆかりにのしかかる。それでもゆかりは折れきってはいない。自分だってずっと頑張ってきた。その思いのみがゆかりを支え、疑問を声に乗せる。

「どうやって……どうやって助けるっていうの？」

「ニュクスは目を醒ますと自身の存在意義に従い、全ての生命に死を与えます。ですがニュクス自体に悪意はございません。問題といえば問題でございますが、眠ってさえいれば害はございません。それよりも現在最も大きな問題はエレボスでございます」

ゆかりはその名を聞いて表情が強(こわ)ばる。

一九九九年、世紀末という世界的社会現象で爆発的な不安が世に蔓延し、死への欲求はいつしか集まり、固まり、黒くなり、化け物へとうねった。それがエレボス。人間の死への欲動。人から漏れ出た悪意の総称。人間は地球上の生命体の中でも自ら死を望む特異な存在だ。現代社会ではそれはさらに加速し、死への憧れともいうべき大きな闇を抱える事態に陥った。それが荒れ狂う様をゆかりたちは二〇一〇年の三月に見ている。

巨大な建物ほどの大きさで四足の姿。色は黒。眼は赤。ひときわ異様だったのが尻尾があるであろう箇所にも頭があった事だ。ゆかりたちに恐怖を抱かせるには十分過ぎる姿だった。

「エレボスがニュクスに接触する事は地球上の生命体が即座に死に絶えると同義。死を与える概念に死を与えられる対象自らが求め、近づくのですから。今この瞬間も活発に活動しているであろうエレボスからニュクスを護っているのが湊様でございます」

エリザベスは結露したたるグラスを両手で持ち、一口唇をぬらす。

「方法はシンプルでございます。エレボスを倒し、ニュクスから湊様をお救いする。然(しか)る後(のち)、ニュクスを封印し直す。このような流れを考えております」

「た、助ける？　どうやって？」

「ゆかり様を初めとする絆を持つ皆様にお力をお借りしたく存じま

す」
「じゃあ封印は？」
「世の生命体皆様より、生を渇望する力をお借りしたく存じます」
借りてばっかじゃん。そう思った時、ゆかりの心に僅かな余裕が生まれる。決して湊を救うことを諦めたわけではなかったが、湊を救うというのは人間では到底辿り着けないような到達点に用意された決勝線であった。湊を救える可能性があるのにそれが出来ないという現実は、救う方法が全くないと言われるより遥かに重くゆかりにのしかかっていた。
それがここに来て光が差し込む。エリザベスはか弱い光と言ったが、一寸先すら見通せぬ闇の中にいたゆかりにとって、その光は全てを消し飛ばすほど目映（まばゆ）かった。
「で、私は何をするの？」
「ニュクスを封印する為の力を手に入れるのを手伝っていただきたく存じます。具体的にはそうですね……シャドウ渦巻く迷宮の踏破、と申せばよいでしょうか」
「シャドウと戦うって事？」
「左様でございます」
「本気で言ってるの？」
「私はいつだって本気でございます」
「湊君を助けられるの？」
「可能性は零ではございません」
「なんで……あなたは助けようとするの？」
「あの方は私にとって大事な方だからです」
この人は本気だ。そして私と同じだ。ゆかりはそう思った。根拠はない。直感。そうとしか答えようがない。だが確信めいた物を感じるゆかり。具体的な方法を聞いたわけではない。可能性が高いわけではない。だがこの二年間、ゆかりが進めなかった一歩をエリザベスは進もうとしている。すがるには十分過ぎる。
「分かった。信じる。あなたを信じる。あなたに、賭ける」

湊を助けられるかもしれない。
ゆかりは胸の奥が強烈にこそばゆくなる感覚にとらわれる。鼓動が高鳴る。そしてぞわりと心が震えた瞬間、困難に立ち向かう為のもう一人の自分、ゆかりのペルソナ、エジプト神話の豊穣の女神イシスが現れる。
驚いたゆかりは背後に現れたイシスを見た。目が合う錯覚。眩い光がイシスを包み込む。
やがて光は人の形をかたどった。腕を。足を。体を。頭を。光は霧散し、ゆかりの背後に現れたのは柔和な表情の中に強さを感じさせる瞳の光。真っ白のローブに身を包み、両手の指を組んで祈る女性。
「これは……新たなペルソナに目覚めたのですか？」
驚きの声を上げたのはエリザベスだ。喫茶店内にいる客は再び二人へと視線を集めるが、ペルソナが見えるのは適性がある者だけ。周りの客には、女子大生の背後の空間を見て驚く、青い服を着た外国人風の女性、といった具合に見えている。
だが力を感じる事ができるエリザベスにとっては目の前でとんでもない事が起こっている。まだ目覚めたばかりにも関わらずこの力強さ。“力”を管理するものとして、いままで数え切れないペルソナと出会い、触れ、実際に行使したが、滅多と無いレベルのペルソナを目の当たりにし驚愕していた。
「また変わったんだ。変われたんだ、私。湊君を助ける為に目覚めた力。私の新しい力……」
ゆかりは力が漲（みなぎ）るのを感じる中、ペルソナはゆかりに自らの事をマリアと名乗る。
エレボスを倒しニュクスを封印し直す。それは死の概念と全人類の悪意を敵に回すと同義。これはある意味世界にケンカを売っているようなものだ。
なんだってかかって来い。ゆかりの中で覚悟そんな風にさえ思える程、覚悟が決まった。

「時に岳羽様。最後に戦ったのはいつでございますか？」
「いつって……組み手程度なら毎日それなりにしてるけど、そういう意味じゃないよね。えー本気で戦ったのは二年前の三月の終わり、かな。あなたと初めてあった日が最後」
「左様でございますか。では少々錆び落としをする必要がございますね」
「へ？　錆び落とし？」
なにやら不穏な言葉に嫌な予感が胸を過ぎる。だがそれ以上に前に進める喜びがゆかりの体を駆け巡っていた。前に進める事の幸せを、ゆかりはこの上なく感じていた。

００２：鳴動する心（後書き）

参考：ウィキペディア－大量絶滅

ｈｔｔｐ：／／ｊａ．ｗｉｋｉｐｅｄｉａ．ｏｒｇ／ｗｉｋｉ／％Ｅ５％Ａ４％Ａ７％Ｅ９％８７％８Ｆ％Ｅ７％Ｂ５％Ｂ６％Ｅ６％ＢＢ％８５

００３：再開の決意

異能（いのう）と異形（いぎょう）。

辞書を繰（く）ると、異能とは人よりすぐれた才能、一風変わった独特な能力、異才とある。

異形は普通と違う怪しい形・姿をしていることとある。ゆかりたちペルソナ使いにとって異能とはペルソナ。異形とはシャドウを指す。

異能、ペルソナは適正を持つ者だけが呼び出せるもう一人の自分である。アルカナと呼ばれるタロットカード主要二十二種のうち、「宇宙」を除く二十一種に分類され、世界の神々、悪魔、聖人など様々な姿で顕現（けんげん）する。

ペルソナによって繰り出す技は異なり、例えばゆかりのペルソナ、アルカナ恋愛ーマリアは疾風と癒しの技を操る事が得意で、電撃は苦手など得手不得手がある。また、原則としてペルソナは一人につき一体である。

異形、シャドウは人間が人間たる源である精神が抜け出したものである。タロットカード主要二十二枚のうち、「魔術師」「女教皇」「女帝」「皇帝」「法王」「恋愛」「戦車」「正義」「隠者」「運命」「剛毅」「刑死者」そして「死神」の十三種どれかに分類され、アルカナに基づいた姿形をしている。

影時間に潜むシャドウは、影時間に象徴化をしていない人間を探しシャドウを抜き去ろうと襲いかかる。

そこには人間だった頃の個性や思考など全くない。

人間の精神であるシャドウが抜け落ちた人間は一人では起き上がる事すら出来なくなり、誰かの補助なしでは生きていけない状態になる。影人間と呼称されるこの症状は、理由が分からない者にとって恐怖以外何物でもない。不幸にもシャドウに襲われた人間に対抗

する手段はなく、後に残るのは影人間となり、起き上がるという考えさえ浮かばない無気力な人間だけだ。
ペルソナとシャドウは本質的には表裏一体。シャドウとは人間から抜け落ちたペルソナであり、ペルソナとは人間が制御できるシャドウであると言える。
だからシャドウはペルソナ使いにしか倒せない。
人の無意識下に存在するニュクスの欠片にして人間の一部。それらがペルソナでありシャドウである。

†◇†◇†

特別課外活動部の一員だった山岸風花。彼女のペルソナはアルカナ女教皇ーユノ。ペルソナとシャドウの観測、解析及び情報収集のスペシャリストである。
風花は遭遇したシャドウのアルカナ、繰り出される攻撃、弱点、その他詳細情報を前線に立つペルソナ使いに念波で伝える。その索敵能力は凄まじく、かつて特別課外活動部が探索していた遙か見上げる高き塔タルタロスでは、グランドフロアに居ながらにして二〇〇階以上の状況を正確に把握していた。攻撃面はあまり期待出来ないが、補って余りある能力を持つダンジョン探索には欠かせない人材だ。
その風花が久しぶりに会ったゆかりを見てまず最初に発したのは、「久しぶり、ゆかりちゃん」でもなく、「どうしたの。急に頼みがあるだなんて」でもなかった。大人しくかなり控えめな彼女が、ゆかりに会うや目を見開き、両手で口元を隠すような仕草で驚きの声をあげる。
「な、なにがあったの、ゆかりちゃんっ！」
午後七時、白い食卓テーブルとセットの黒いイスに座っているエリザベスと、玄関の鍵を開けたゆかりとを風花は交互に見ている。予想を少し超えた風花の一言にゆかりは思わず苦笑した。

「いや、風花にも話聞いて欲しくって。ゴメンね、急に呼んだりして」
「ううん、そんなの別に構わないよ。それより一体何があったの？」
「まぁ上がって」
どうやら部屋に入る事すら忘れるほど焦っていたようで、ゆかりに促されようやくここがまだ玄関である事を思い出したのか、風花はうつむき恥ずかしさで顔を赤くしながら淡い緑色の靴を脱いだ。
「こ、こんばんは、エリザベスさん」
「夜分遅くに申し訳ございません、山岸風花様」
「こんばんは、アイギス」
「こんばんは、風花さん。お久しぶりです」
「あれ、風花とエリザベスさんって顔見知りだっけ？」
部屋に上がった風花はまずエリザベスに挨拶をする。続けてアイギスと挨拶を交わすのだが、ゆかりはすっとエリザベスという名前が出て来た風花を不思議に思う。そんなゆかりの表情を察したのか、風花は微笑みながら説明する。
「顔見知りというか……以前会った事があるの」
「ああ、一月三十一日？」
ゆかりが思い浮かべたのはゆかりとエリザベスが出会った日。確かに風花やアイギスを初めとする特別課外活動部の面々はベルベットルームという青一色の不思議な部屋で、エリザベスとその主であるイゴールという老人と会っている。だが、風花は首を小さく横に振った。
「違うの。実はそれよりも前に湊君とエリザベスさんは戦っていて、私はその時もナビをしていたから」
「なっ！？」
イスから立ち上がる音がした方へ振り向いてみれば、アイギスが瞬く速さで戦闘態勢をとっていた。イスから飛び跳ね、ゆかりを左手で抱えるとエリザベスとの距離を最大限に確保する。右手に仕込まれた機関銃へ弾丸が装填される音が部屋に鳴り響く。驚いたのは

ゆかりと風花だ。
「ちょ、ちょっとアイギス！？」
「警告します。妙な動きはやめてください。少しでも怪しい素振りを確認すれば警告無く発砲します」
アイギスに護られる形で背中から抗議するゆかり。だがアイギスは一切耳を傾ける事無く、エリザベスから一瞬たりとも目を離さない。
「私もあなた方には大変お世話になりました。あの時ご助力いただかなければ、目覚めた「ワイルド」の力も宝の持ち腐れだったでしょう」
キュイイン、と小さく唸る作動音。蒼い瞳の奥にあるカメラが黄金の瞳を中心にエリザベスの顔に焦点を合わせる。
「ですが、湊さんと戦ったなどという話は聞いておりません。このタイミングでゆかりさんにコンタクトした事といい、大変失礼ながらあなたが敵でないという証明をお願いします」
「だからっ！　ちょっとアイギス！」
「アイギス！　どうしたのいきなり！？」
ゆかりと風花の制止に耳を全く貸さないアイギス。その目はエリザベスのあらゆる筋肉の動きを監視している。少しでも妙な動きを見せたら指に仕込まれている機関銃を撃つという言葉に、偽りや誇張は全くないのだろう。
エリザベスは紅茶の入ったティーカップを静かに置く。黄金の瞳と蒼い瞳が交差した。
「私が湊様と相対しましたのは、あの方なら私に勝つのではないか、私にその先にある答えを教えてくださるのではないかという希望を抱いたからでございます。そしてそれは見事に叶いました。ですから私にあの方への敵意など微塵もございません。あるのは敬意と好意のみでございます」
「こ、好意！？」
アイギスの背に隠されていたゆかりは飛び出すかのように前に乗

り出す。黒い瞳が黄金の瞳へ一直線に向けられる。やはりそうか、とゆかりは自身の直感が正しかった事を確信する。
「ちょっと、ゆかりちゃんまで！　湊君への好意なんてみんな少なからずあるでしょ？　アイギスも右手を下ろして。湊君とエリザベスさんが戦ったのはお互い合意の上での力比べみたいな感じだったんだから。とにかくエリザベスさんのお話を聞きましょ。ね？」
　ゆかりは風花の言葉に我に返り、アイギスはしぶしぶといった様子で警戒を幾分緩くする。エリザベスは少し冷えた紅茶を一口飲んだ。
「なるほど。少なからずお有り、なのですね」
　ティーカップを右手に持ち、エリザベスはボソリとつぶやく。黄金の瞳が淡く緑がかった黒い瞳に向けられた。「あぅっ」と小さく声を漏らし、風花は頬をうっすら赤く染めうつむく。風花の様子を見てエリザベスはティーカップをそっとソーサーに置くと、凛とした姿勢をいっそう正し、ゆかり、アイギス、風花へと向き合った。
「ご無礼ながら単刀直入に申しますと、私がこちらへと参りましたのは湊様をお救いする為でございます」
　部屋に強烈な衝撃が走る。風花の驚愕。アイギスの驚き。あのアイギスが警戒を忘れてエリザベスを呆然と見ており、風花は完全に言葉を失っていた。数時間前、ゆかりが受けた衝撃と同じものだ。
「皆様ご承知のように、現在湊様はニュクスを封印すべく、自らをくびきとし世界を護っておられます。私はあの方をお救いしたい。ですが、ニュクスが復活しても良いとは決して考えてはおりません。湊様をお救いした後、ニュクスを封印し直します。その為に必要な物も朧げながら分かっております」
「必要な物とは何ですか？」
　いち早く立ち直ったアイギスは、話の真偽を判定するかのように質問を挟む。ゆかりは固唾を飲んでエリザベスの返答を待つ。
「はい。私がまず疑問に思ったのは、遥かなる昔、一体どなたがニュクスを封印したのだろうか、でございました」

「そう言えば……」
風花のつぶやくような同意。表情はいつも思案する時のそれに戻っている。頭の中では凄い速さで幾つもの仮説と証明が繰り返されているのだろう。
「少々探し当てるのに時間がかかりましたが、古の文献には地球に生ける全ての意思の集まりがニュクスを封印した、と書かれておりました。さらに詳しく調べましたところ、その集まりはどうやら『アイテール』と呼称されているようでございます。『エレボス』が死への憧れならば、さしずめ「アイテール」は生への渇望、と申しましょうか。そこで私はアイテールを探し出し、ニュクスをもう一度封印しようと考えております」
「どこに行けばアイテールはあるの？」
小難しい事は分からない。ゆかりはただ分かりやすく自分がどこに行って何をすれば良いのかを求める。夢でまでうなされた光が手を伸ばせば掴めるような、そんな錯覚すら感じていた。
「皆様の世界では「集合的無意識」と呼ばれる所ではないかと考えております。そこはかつてニュクスが封じられていた所であり、全ての生命が繋がっている場所。その奥にアイテールは在るのではないか、と私は考えております」
「じゃあ、早速……」と言いかけたゆかりの言葉を制すように、エリザベスは言葉を重ねる。
「その前にお手並みを拝見したく存じます。かの場に居着く異形はタルタロスのそれと比較になりません。モナドを容易く踏破出来る程度のお力は必要かと存じます」
「モナドを容易くって……」
モナドと聞いてゆかりは露骨に嫌な顔をする。深層モナド。かつてゆかりたち特別課外活動部が遙かなる最上階を目指したタルタロスの封印されし地下階層部分であり、そこはゆかりにとって地獄以外何物でもなかった。
どんな人間から抜け落ちたらあのようなシャドウになるのか。

そこに巣くうモノは全てタルタロス最上階にいたシャドウより遙かに凶悪で禍々しかった。二年前、湊率いる特別課外活動部は最終決戦に備え、経験を積みにモナドへ挑んだのだが何度も全滅の危機に瀕している。迫る轟炎。逆巻く風嵐。迸る雷電。尖る氷牙。振り上げられた剣は全てを叩き斬り、唸りをあげる拳は全てを叩き潰す。身体的に精神的にどれもが致命的で、ただモナドにいるだけでゆかりの心は抉るように削られた。そのような場所を容易く踏破出来る程度の力がいるとエリザベスはさらりと言い放ったのだ。

「岳羽様、アイギス様、山岸様。明日、もしよろしければお手合わせいたしましょう」

拒否権はないだろう。断ればそれは湊救出を断念する事と同意。ゆかりは緊張した面持ちで頷き、アイギス、風花と目を合わせる。二人は目が合った瞬間に頷いてくれた。

紅茶を飲み終わったエリザベスはゆかりの返答を受け、「それでは」と席を立ち、丁寧に紅茶の礼を述べると家から出て行こうとした。不意に過ぎった疑問をゆかりは口にする。

「ちなみにエリザベスさんはどこに住んでいるの？」

「あいにくこちらの世界に居は構えておりません。どこか適当な場所で朝を待とうと考えております」

「いやいや、それはないから」

ゆかりは机の引き出しから鈍く光るカードを取り出す。カードに２０３と刻印されている事を確認すると、ゆかりは胸ポケットにしまう。

「それは？」

不思議そうな風花の表情。エリザベスは何も分からないゆえの無表情か。

「美鶴先輩からここの部屋全部の鍵を預かってるの。今日のところは２０３号室でエリザベスさんには寝てもらおうかなと思って」

明日にでも電話入れとけば大丈夫でしょ、と風花に言いながらゆかりは押し入れへと向かう。二組の布団を取り出すと一組は自分の

部屋へ、もう一組をソファーの上に置く。次にクローゼットの扉を開けた所で、後ろにいる風花へ振り返る。
「風花も泊まって行くでしょ？」
「え？　そんな、悪いよ」
「いいっていいってそんなの。いまさら遠慮なんていらないって。服とか私の使って」
ソファーに置いてあった布団の上に灰色のスエット、歯ブラシやシャンプーなどトラベルグッズのような物を乗せ、「よっ」と小さな掛け声とともに持ち上げるとゆかりはなおも遠慮する風花に背を向け二〇三号室へと向かう。
隣の隣、二〇三号室は今だ誰も住んだ事の無い部屋だが、アイギスが四日に一度掃除している為きれいに保たれている。照明とエアコンは備え付けなので、布団さえあれば一泊する程度なら不便はない。リビングルームを通り抜け奥の部屋に布団を敷くと、着替えのスエットをエリザベスに手渡す。
「シャワーの使い方とか分かる？」
「シャワー、でございますか？」
「そう。このボタンがお湯のスイッチ。これを押さないといつまで経っても水しか出ないから気をつけてね。で、後はここを回すとお湯、下向きに回したら水。水量はこっち……って、これは分かるか」
「これはっ！　以前、命の源たる水をもてあそぶ罪深きアートを拝見しましたが、人はかくも水を自在に操っておいでなのですね。アギ？　ブフ？」
アギとは炎を操る最も初歩のスキル。ブフは氷を操る最も初歩のスキルだ。興味津々、エリザベスは黄金の瞳をきらきら輝かせシャワーハンドルを見ている。
「いや、そんなスキル使ってないから。てか、その『水をもてあそぶ罪深きアート』って何？」
「以前湊様にご案内いただきました『ぽろにあんもーる』と呼ばれる所にございました。その魔性ゆえに硬貨を投げ入れた者の願いを

叶える、と聞いております。私もそれに倣(なら)い、いくらか投げ入れたのですが、このような事になるのならもう数百万円程投げ入れ、ニュクスの封印をお願いすれば良かったと今更ながら後悔しております」

「噴水！？　てかニュクスの封印なんて普通に無理でしょ？」

「……言われてみますと、確かにその通りでございますね」

神妙な顔付きのエリザベスを見ていると、どこまで本気なのかさっぱり分からない。ゆかりは苦笑とも愛想笑いともいえる表情を浮かべる。だが、エリザベスの言葉はまだ続きがあった。

「さすがに数百万円程度では足りないのも道理。もっと硬貨を用意すべきだったのです。全く、うかつでした」

「あー……」

どこからつっこもう。つか、こんな人だったのか。ゆかりの中に親しみと不安とツッコミたい衝動が一気に広がった。

二〇一号室に戻ったゆかりは、まだ泊まる事を決心しかねている風花を見て「先にシャワー浴びちゃって」と右手で文字通り背中を押した。手早く寝間着(ねまき)を脱衣所に置き、化粧水やらドライヤーやら思いつくまま洗面所に並べ「ごゆっくり～」と声をかけて扉を閉める。その間に自分の部屋に風花の布団敷く。シャワールームから水音が聞こえる頃、ゆかりはリビングルームのイスに腰掛けた。

「さっきの話、どう思った？」

洗い物をするアイギスの背中に問い掛ける。カップを洗い終わった手をふきんで拭きながら、アイギスは答える。

「不確定要素が多すぎますね。それにあの方の動機が分かりません。ですが話の内容としてはこの上なく魅力的ですし、時が止まったあの時には私もお世話になった方なので、悪い人ではないと信じたいです。ここは油断なく状況を見据えつつ、さらなる情報の収集を図るのが良いと思います」

「動機はなんとなく分かるんだけどねぇ」

ゆかりは冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、コップに注いだ。とくとく、と小気味良い音の中、透明のコップに透明の水が満たされていく。
「私はやってみたいと思ってる。この二年、何の進展もなかった湊君の事が前に動こうとしている。なら私はそれにすがりたい」
――　彼に会いたい。会いたい会いたいの！　理屈なんて無いの！！
二年前、みんなの前で叫んだ言葉をゆかりは思い出す。当時はまだ高校生だった。今はもう大学二年だ。
たった二年？　違う。湊に会えなくなってもう二年だ。
けれどゆかりは迷っている。個人的な感情でみんなを巻き込んでいるのだろうか。やっと戦いから離れ、平穏な毎日を過ごしている風花まで巻き込もうとしている。
ゆかりはちらりと白い綿パンに青いシャツを着たアイギスを見る。ゆかりの瞳に映るのは、湯を沸かし紅茶の準備をしている普通の女の子だ。再び対シャドウ兵装に戻れと言っていいのだろうか。
ゆかりは考える。手伝って欲しいと言えば、二人は間違いなく手伝ってくれるだろう。例えばもし立場が違って、風花やアイギスがゆかりに手伝って欲しいと言ってきたら即答するだろう。それどころか声をかけてくれなかったら激怒するかもしれない。
一体私はどうしたいのか。短くない時間、深く何度も自分に問い掛け続けたが、コップに注いだ水が底をつく頃、自問自答の解が出る。
「私、ホントに自分勝手だと思う。だって二人を戦いに巻き込んでしまうと分かっていて、アイギスと風花に手伝って欲しいって考えてる」
「手伝うに決まってるでしょ、ゆかりちゃん」
バスルームの扉が開く。ピンクのTシャツにバスタオルを頭に巻いた風花が力強く肯定する。湯上りで火照った白い肌が妙になまめかしい。

「私の一番の大切は、あの方のそばにいる事であります」
「あは。久しぶりにそれ聞いた」
二年前によく聞いたアイギスの口癖をアイギス自身が真似をする。柔らかな空気が部屋を包む。
「ありがとう」
「うん。私だって湊君助けたいのは一緒だから」
「はい。一緒に今度こそ助け出しましょう。皆さんの事は私がお守りします」
仲間との再会。それは戦いの再開を意味していたのかもしれない。

「ところで風花。ちょっと会わない間に胸大きくなってない？」
「え？　ええっ！？」
ベッドの上で横になっているゆかりは、布団の上で座っていた風花に気になっていた事をなんの脈略も前振りもなく突然聞いた。慌てて両手で胸を隠す風花。顔を真っ赤にしながら視線をあたふたと右へ左へ彷徨わす。
「そ、そんな事ないの！　そ、それよりよりゆかりちゃん。ペルソナ、一体どうしたの？」
「なーんかすごい誤魔化し方。ま、いいか。実は数時間前に変わったの。アルカナ恋愛。名はマリア。聖母マリア。湊君を助けるって決心した時に目覚めた私の新しいペルソナ」
ゆかりは過去に一度、ギリシャ神話のイオからエジプト神話の女神イシスに変わっている。今回で都合二度目だ。
「相当すごいよ。ちゃんとデータとってみないと正確な事は言えないけど、格段に各種パラメータが上がっていると思う」
まだ羞恥によりうっすらと顔は赤いが、表情はすっかりいつも通りになっていた。
風花はペルソナ一ユノから入手したペルソナやシャドウのデータを全て数値化している。幾つかの項目に分類し、ステータスと使用スキルからレベルをはじき出し強さの目安にしていた。

シャドウに強さがあるようにペルソナにも強さがある。鍛えればそれなりに成長していくが、ステータスには限界値があり、ペルソナによって異なる。初めから強いペルソナは能力値の上限も期待でき、それはそのまま強さへと直結する。
「でしょ？　これでちょっとはアイギスに追いついたと思うんだ」
「ペルソナの付け替えが出来るアイギスと新しいペルソナのゆかりちゃん。これならあのエリザベスさんにも対抗できるかもしれない……」
「……そんなにエリザベスさんって強いの？」
「桁が二つは違う感じ」
「け、桁が二つ！？　そんな人に湊君は勝ったんだ！」
「湊君の戦略構築がエリザベスさんの強さよりちょっぴり上だった、ってイメージかな。でも正直なところ運もあったと思う」
「しかしエリザベスさんって美人だよね～」
「うん。初めて会った時は強さに驚いたけど、近くで見ると美人すぎて驚いた」
「肌の白さとかきめ細やかさとかホント……」
午後十一時、ゆかりにとって、本当の意味で気が置けない相手である風花との女子トークは深夜まで続いた。

００３：再開の決意（後書き）

デジタル大辞泉より

異能／異形

００４：最強と最凶

あまり明るくない煉瓦造りの広い空間。どこからか吹き込んでくる風が前髪を撫で、ねっとりとした湿気が体に纏(まと)わり付く。頬を伝う汗が唇に当たり、そして床を濡らす。

「私、エレベータガールを務める身ではございますが、多少荒事の心得もございます。どうぞご遠慮なさらず殺すつもりでお出でくださいませ」

エリザベスは左手で埃を払いながら事も無げに話す。殺気はほとんどない。だがとてつもない威圧感がゆかりたちに重くのしかかる。ゆかりは前方に警戒を置いたまま、左に意識を僅かに寄せた。片膝をついたアイギスと視線が交差する。

「アイギス、今度は私が突っ込む。援護して」

「了解です」

ゆかりは頬を伝う汗を左手で乱暴に拭(ぬぐ)い、まるで一人静かな森に佇むかのようなエリザベスへと走り出す。

エリザベスとの手合わせはアイギスが先陣を切った。幾度かのフェイントから左回し蹴りをするがエリザベスは右手でなんなく受け止め、隙だらけなアイギスの軸足を払う。体勢を崩すアイギス。そこにエリザベスは右手を軽く合わせた……ように見えた。

次の瞬間、ゆかりの視界はアイギスの白い背中で一杯になる。吹き飛ばされる二人。間一髪、アイギスがゆかりの頭部に手をまわし、ゆかりと壁との直撃はかろうじて回避したが、それでも衝撃は相当な物だった。

長らく命を削るレベルの実戦から離れていたからだろう。完全にゆかりは油断していた。いや、甘く考えていた。これが命のやり取り、実戦ならばゆかりの死をもって終わっていたところだ。意識を組み手から戦闘へと引き上げ、丹田に力を込める。

エリザベスへと駆けるゆかりは間合いに入る直前、右手に持つ鈍く光る銀色の銃を自らのこめかみに当て、迷い無く引き金を引いた。辺りにガラスが割れるような破砕音と鎖を引きちぎるような断裂音が混ざり、響く。だが弾は撃ち出されていない。その代わり、ゆかりの背後に光が集まった。

召喚器と呼ばれる銃で自らを撃つ事によりペルソナ召喚の儀は始まり、終わる。ゆかりの背後に集まった光から真っ白な衣と真っ青な外套を揺らし、眩く慈愛に満ちた女性が現れる。アルカナ恋愛――マリア。ゆかりのペルソナだ。

ゆかりは走る。マリアは両手を広げ、天を仰ぐ。そして――

「召喚しただけ！？」

エリザベスの驚き。マリアは何をするでもなく再び光りの中へと消え去る。意識がそちらへと傾いたのはほんの一瞬だろう。だけどゆかりには得難い一瞬だった。

「もらったっ！」

懐に飛び込んだゆかり。エリザベスの右足を踏み抜き左正拳を放つ。拳が脇腹に到達する頃、アイギスの影がエリザベスの視界を掠めるように飛び込んでくる。

右足をゆかりに踏まれているエリザベスは右手でゆかりの拳を払う体勢を、左手でアイギスに応戦を仕掛けた。ゆかりよりアイギスの攻撃を脅威と判断したのだろう。それは間違いではない。だがゆかりにとってはうまくない。

元々当てるつもりなど毛頭なかったゆかりは、残像が出来るほどの速さで左拳を引く。ねじれは腰を介し威力となり足へと伝わる。弧を描く右足。端点となるのはエリザベスの顎。だがエリザベスの反応は速かった。エリザベスは攻撃を払うのではなくゆかりを払いにかかる。突き出す右掌底。ゆかりの体が宙に浮く。

「っ！？」

ゆかりに触れる事なく空を切るエリザベスの右手。自ら飛んだゆかりはエリザベスの視界を一瞬遮る。エリザベスの判断は間違って

いない。間違いなくアイギスの攻撃の方が脅威なのだ。ならばゆかりのする事は一つ。アイギスの攻撃が当たるようにお膳立てする事。アイギスの指に仕込まれた機関銃が火を噴いた。

赤い光が走る先――　弾丸が撃ち抜いたのは青い服の残像。意識を二転三転振り回されたにも関わらずエリザベスは弾丸を避けるという離れ業を見せる。鳴り止んだ銃声。響く破砕と断裂の混ざる音。アイギスの攻撃を避けきったエリザベスの瞳に映ったのは、両の手を広げ天を仰ぐマリアだった。

「マハガルダインッ！」

マリアが放った狂おしく荒ぶる風、疾風系広域最強スキルはエリザベスを中心に周囲全てを捻じ曲げ、切り裂きにかかる。煉瓦造りの広い空間に風速二十メートルをゆうに超える暴風と鎌鼬（かまいたち）が発生した。

風速二十メートルとは時速七十キロ程度に相当する。これは何かにつかまっていないともはや立っていられない『非常に強い風』だ。ゆかりが放ったマハガルダインはそのさらにもう一段階上の威力、『猛烈な風』に該当する。時速は１１０キロを超え、台風ならば屋根が飛び、樹木が根こそぎ倒れ、木造住宅の全壊が始まるレベル。そこに真空の刃が織り交ぜられている。そんな風がただ漠然と吹くのではなく、明確にエリザベスを狙って吹き荒れる。

「三段構えの陽動、お見事でございます。ですが」

動じない。エリザベスは動じない。風障逆巻き荒れ狂う中、ほんの僅か表情を歪めるだけのエリザベス。台風に匹敵する暴力的な風ですら彼女の髪を乱れさせる程度。すらりと長い右手を上げ、風の発生源となっている核の方向へと振り下ろす。風が消えてゆく。収まったのではなく力任せに押し込んだ、というニュアンスが正しい。

だが、ゆかりはエリザベスへお返しとばかりに微笑む。

「だから、本命はこっちじゃないってば」

エリザベスの背後。アイギスの召喚したペルソナ、アルカナ太陽――　スパルナは疾風系最強スキル、『万物流転』をゼロ距離で解

き放つ。耳をつんざく轟音が辺りを支配した。

『ゆかりちゃん、アイギス、油断しないで。万物流転がヒットしている最中にクー・フーリンに切り替えてる。疾風は吸収されてる』

「だよねぇ」

風花の言葉にゆかりはエリザベスの規格外な力を改めて実感した。攻撃を受けている最中に、その攻撃属性に耐えうるペルソナに切り替える。ゆかりやアイギスの持つペルソナの常識からしてみれば、これはあり得ない事だ。土埃舞う前方を見据えつつ、飲みかけのペットボトルをあおる。まるで現在の状況を表すような生温い水がゆかりの喉を潤した。

「岳羽様とアイギス様の攻撃構成、かなり驚きました。そして山岸様のサポートも的確かつ適切。なるほど、奇跡を起こしたのは伊達じゃないという事でございますね」

全く驚いた素振りがないが、全てが社交辞令という訳でもなさそうなエリザベスの言葉。右に五枚、左に五枚、計十枚のカードを両の手に持つ。黄金の瞳の奥に何かが揺らめいた。

「岳羽様。それにアイギス様。私達が進もうとしている道はとても細く、そして大変険しいもの。命を失う事になるかもしれない。その覚悟はございますか？」

「覚悟は……出来ている。私は湊君を助ける。そう決めた。もう、迷わない。」

ゆかりの返答。頷くアイギス。エリザベスは少し微笑み、そして目を細める。あたりの景色が歪む。

『気をつけて。いよいよ本気みたい』

「ゆかりさん、今度は私が行きます」

援護をお願いします、とアイギスは続けない。ゆかりは分っている。そして風花も分っているだろう。

湊に続き、『ワイルド』（なんにでもなれる可能性）の力に目覚めたアイギスは、ペルソナは一人一体という理（ことわり）の外にいる。状況

に合わせて様々なペルソナに付け替える事が可能で、火炎、氷結、疾風、電撃、光、闇、そして万能と全ての属性を、十を超えるペルソナたちを召喚し紡ぎ出す。

機械の乙女ならではの耐久力、スピードとパワー。最高ランクのスキルを操るワイルドの力に目覚めた最強のペルソナ使い、アイギス。

対するエリザベスは機械の乙女であるアイギスの蹴りを右手一本で受け止め、軽く当てた程度でアイギスとゆかりを吹き飛ばす膂力。広域疾風系最強スキル、マハガルダインを叩き潰し、攻撃に転じればアイギスをもってして回避一択と言わしめる凶悪極まりない斬撃。繰り出すスキルは敵にとって全てが絶望でしかない威力。アイギスとは違った形でペルソナは一人一体の理（ことわり）の外いるエリザベスは、タロットサイズのカードに描かれたペルソナをデッキの中から自在に選び、召喚出来る。

風花曰く、強さの測定不可能。凶悪な攻撃を繰り出す力（ペルソナ）の管理者。最強なる者、エリザベス。

最強対最強。湊が言ったという言葉をあてるなら最強ＶＳ最凶。

挨拶代わりから始まり小手調べを経て、ついに力比べが始まった。

†◇†◇†

午前六時三十分。目覚ましの音に驚いたゆかりは慌てて起き上がり、痛みに顔をゆがめる。筋肉痛に見舞われるなど久しぶりの事だ。ベッドから立ち上がろうと腕に力を入れると走る痛み。腹筋、ふともも、ふくろはぎとほぼ全身が筋肉痛だった。ゆかりはぎしぎしと痛む両腕を見ながらほんのわずかに口角を上げる。痛みが来る事への小さな覚悟を固め、ゆかりはベッドから立ち上がった。部屋の扉を開けると朝ご飯を作っているエプロン姿のアイギスとなんとも香ばしいベーコンの匂いがゆかりを出迎えた。

ゆかりはアイギスと朝の挨拶を交わし、毎朝の習慣であるコップ

一杯の水を飲みながら、カウンターへと近づく。そこにはゆかりお気に入りの小さな小さなもみじの木があり、毎朝様子を確認する。指で葉を揺らすと、まるで朝の挨拶をするかのようにぴょこんとはねるもみじ。青々とした葉が美しい。窓からは朝日が差し込み部屋全体が柔らかく明るかった。

「っ！」

コップをテーブルに置こうとした時、腹筋に鈍い痛みが走る。ゆかりの口から漏れたのは本当に小さな声だったが、アイギスはしっかりと捉えたようで、心配そうにゆかりへと振り向いた。

「大丈夫ですか？」

「ん、痛い。筋肉痛なんて久しぶり。アイギスは大丈夫？」

「はい。なかなか激しい戦闘でしたが、幸い（さいわ）自己診断でも簡易全身スキャンでも異常は見当たりません。ですが今後の事を考え、メンテナンスとパーツ換装の為今度ラボへ行こうと思います」

一緒に遊んだり、買い物をしたりと人間となんら遜色ない付き合いが出来るゆえに、ゆかりはついアイギスが機械の乙女である事を忘れがちだが、アイギスは自然に治癒はしない。人間よりはるかに高い耐久性を誇るが、傷付いた体は直さない限り直らない。軽微な損傷やある程度のパーツ交換ならアイギス本人でも出来るが、本格的なメンテナンスや修復となるとやはりラボで行う事になる。戦闘行動がなければ数年はメンテナンスフリーだが、激しい戦闘の後は毎回メンテナンスを行う事が本来は望ましい。

ああ、戦いの世界に戻ったんだ、と再認識するゆかり。そして、そのきっかけである人物がこの場にいない事に気が付く。

「ところでエリザベスさん……じゃない、リズだ。リズは？」

「まだ来てないですね」

昨日の別れ際、ゆかりはエリザベスを『リズ』と、エリザベスはゆかりを『ゆかり』と呼び合う事を決めた後、これからは朝食を一緒にとる約束をした。

朝は弱いのだろうか。ひょっとしたらまだ寝ているのかもしれな

い。シャワーを浴びながら「この熱さは……アギラオ！？」とか予想を超えた事を言っているのかもしれない。エリザベスの事を考えていたゆかりは、昨日から疑問をふと思い出しアイギスに尋ねる。
「ところでさ、どうしてエリザベスさんの略称が『リズ』なワケ？
『エリ』の方がしっくりくるじゃない」
「エリザベスをアルファベットで書くとＥｌｉｚａｂｅｔｈ。『リズ』はＥの次に綴られる『ｌｉｚ』から来ているようです。エリザベスの略称としては『リズ』か『ベス』が一般的みたいですよ」
「ふーんそうなんだ。リズ、か。なんか聞き慣れないなぁ」
「そうですか？」と話すアイギスは一人分のベーコンエッグをテーブルに置く。テーブルにはすでにアイギスお手製のサラダが用意されている。真ん中にあるプチトマトの赤がとてもきれいだ。ちん、と甲高い音を鳴らしたトースターからゆかりはこんがりきつね色に焼けたパンを取り出し、ベーコンエッグの左隣に置いて席に着いた。
「ゆかりさんは今日美鶴さんとお会いになるのですね？」
アイギスは緑のエプロンを外し、ママレードジャムをパンにぬるゆかりの向かいに座る。エリザベスの住むところは結局二〇三号室に決まった。建物の所有者である桐条からは建物全て自由に使ってくれて構わないと言われているのだが、部屋を使う事や湊を助ける事などの報告かねがね、今日の十時に駅前のカフェで会う約束をしている。
「うん。でも先輩、相変わらず忙しいみたい。三十分だけだって。何か伝えておくことある？」
「ラボの件を伝えてもらえると助かります」
「おっけ。りょ～かい。……美鶴先輩、驚くかなぁ」
「驚くと思いますよ。私も最初に聞いた時、少し処理に時間がかかりましたから」
「だよね！　私も喫茶店で大きな声出したし。って、ひょっとしたら私、痛い子だった！？　うわ、思い出したら恥ずかしくなってきた！」

ゆかりが食事をする時、アイギスはいつもゆかりの向かいに座る。アイギスが食事を共にする事はないが、二人は話をしながら同じ時間を過ごす。ここ数年変わらないいつもの風景だ。今日はそんな風景に一名加わるはずだったのだが、結局エリザベスは朝食の場に現れなかった。

出掛ける準備を終えたゆかりは、行きがけに２０３号室をノックした。だが反応はやはり無かった。どうしようかと視線をさ迷わせ、なんとなく時計を見れば針はそろそろ駅に行かなくてはならない時間を指している。疲れているからまだ寝てるのかな、と結論付けゆかりは駅へと急いだ。

桐条と待ち合わせているのは、ゆかりの家からニ駅向こうのカフェ。自家製チーズケーキが評判の人気店だ。ダークブラウンでまとめられた店内を見渡すと、ビジネスマン風の客が数組コーヒーを飲みながら本を読んでいる。女性は見当たらない。

「まだ来てない……よね」

天気は良いがテラスでお茶をするにはちょっと肌寒いと思い、ゆかりはそのまま奥へと進む。空いていた四人掛けの席に座り、携帯を取り出し桐条の到着を待った。

店員が運んできた水が半分になった頃、急に店内がざわついた。あ、来たかな？　とゆかりが入口へと視線を向けると、サングラスをかけた黒服の男性が一人。その後ろ、分かりやすく一般人ではない雰囲気を纏ったタイトスカートの女性が一人立っている。

「先輩、こっちこっち！」

ゆかりは入口に立つ女性に向かって小声で呼びかけ手を振る。迷惑にならない程度の声だったが、サングラスの男がすぐにそれを気が付き、隣に立つ女性に伝える。ゆかりと目が合った桐条は顔をほころばせ、小さく手を振った。

特別課外活動部の総リーダーであり、当時の月光館学園生徒会長だった桐条美鶴。腰まである長い髪と切れ長の目が印象的な美人で、

大学生でありながら世界に名だたる桐条グループの若き頭首として活躍している。
桐条グループは桐条の祖父の頃からペルソナとシャドウの研究に取り組んでおり、ゆかりたちも使っている召喚器は研究過程で開発されたものだ。召喚器は弾丸が発射されない特殊な銃で、召喚器を使わずに召喚する事は出来なくはないが、安定や効率を考えると使わない理由を見つけにくい。着火で例えるなら火打石とライター程の差はあるからだ。他には適性が無い者でも影時間に動くことが出来る装飾、対シャドウ兵器など様々なものが開発されている。
研究所最大の目的は時間への干渉だった。だが桐条の祖父はいつしか闇に魅せられ狂気に染まる。結果、桐条グループは計り知れない負の遺産を抱え込む事になった。桐条の父はその業を一身に受け止め自分の代でなんとかしようとするが、志半ばにして桐条の目の前で凶弾に倒れる。
ただ父の為に。その思いのみで生きてきた桐条は失意のどん底に落ちるが、父の意志を引き継ぐ事に光を見出だし再び立ち上がる。きっかけはゆかりであった。以来、桐条にとってゆかりは気の置けない人物として、高校を卒業してからも親しい交流は続いていた。
「おはよう、ゆかり。遅くなってすまない」
「おはようございます、先輩。私も今来たばっかですよ。あ、先輩と早川さん何にします？　まだ注文してないんですよ」
「いえ、自分は結構です。美鶴様、私は表におります。岳羽様、お気遣いありがとうございます。それでは失礼します」
サングラスをとり、ゆかりに一礼して外へと出て行く黒服の男。桐条のボディーガードを務める早川とゆかりは面識があった。
「で、どうしたのだ。何か報告があると言っていたが」
注文を終えた桐条は足を組み直してゆかりを真っすぐに見る。気恥ずかしくなり思わず目を逸らしたくなる美貌。そして組織の長(おさ)が纏うある種独特の威圧感。気の小さい者なら逃げ出したくなる状況だ。桐条も高校時代、ゆかりに負けず劣らずかなりの人気だったが、

そのベクトルはどちらかというと憧れの対象だった。桐条財閥当主の一人娘という、浮世離れした存在に近寄り難さもあったのだろう。親しくしたいというより、見ていたい。そんなイメージの人気であった。

だがゆかりは桐条の美貌も雰囲気も家柄も全く気にしない。慣れたのではなく気にしない。女の子が一つ年上の女の子と接する。簡単そうでとてつもなく困難な事を自然に行っていた。

「最近全然先輩と会ってないなぁってのもあったんですけど、取り急ぎ言っておかなくちゃいけない事があって」

「ほう。彼氏でも出来たのか？」

「って、なんで彼氏っ！？　……でもまぁ、あれかな。出来たって言うより、光が見えたって言うか」

「光？」

「実は湊君をニュクスから助けられるかもしれないんです」

「なっ、ニュクスだと！？」

ゆかりにとって桐条の反応は予想通りだった。だが期待通りではなかった。ゆかりが想像していた驚きと桐条が見せた驚きはどこか違っていた。切れ長の目はわずかに鋭くなり、談笑から報告を受ける姿勢へと変わる。

「詳しく聞かせてくれ」

「先輩はエリザベスさんって覚えてます？」

「エリザベス？　イギリス連邦王国女王か？」

「や、そっちじゃなくて。ほら、三月三十一日の時、青い不思議な部屋に鼻が長いおじさんと一緒にいた、青い服着た女の人です」

「青い服の女……。なんとなく覚えはあるがはっきりとは覚えていないな」

「まぁそのエリザベスさんが二日前に突然私の前に現れて、湊君を救いに来たって言ってきたんですよ」

「二日前、か」

校門の前でゆかりを待っていた事。喫茶店でこちらの世界に来た

目的を聞いた事。その日の夜にアイギスと風花に話を聞いてもらった事。どうやって湊を救い出すのかを聞いた事。そして実力を見たいと言われ、手合わせを昨日行った事。ゆかりは少しばかり詰まりながらも桐条にひとつひとつ丁寧に説明した。　ある程度説明を終えたところで、乾きを癒すかのように紅茶を飲み、息を吐く。ゆかりの話にタイミング良く相槌を入れていた桐条はゆっくり腕を組み、

「なるほどな」と一言つぶやいた。席上に沈黙が訪れる。

「それで、勝ったのか？」

　最初に沈黙を破ったのは桐条だ。ゆかりはひとつついたため息に言葉を続ける。

「いえ、こてんぱんに負けました。完敗です」

「アイギスとゆかりの二人掛かりでか？」

「二人掛かりですよ。あ、そういえば私、ペルソナ変わったんですよ。イシスに比べてすっごい強くなったんだから！」

「でも負けた、と」

「そうなんですよ。二人掛かりでしかも全力。けど相手は手加減してるんですよ。あの強さはちょっと反則ですよ。まったく、へこむなぁ」

「そんなに強いのにゆかりに応援を求めてきたのか？」

「言われてみればそうですね。てか『アイテール』があるとこはよっぽど厳しいんでしょうね。なんせあの『モナド』を楽々クリアできるレベルは欲しいって言うんですから」

「モナドを！？」

「無茶だと思いません？」

　報告はいつしか昔話へと移り、そしてなにげない会話へと変ってゆく。桐条の表情はだんだんと柔らかくなり、微笑む回数が増えてくる。聞こえてくる声の七割はゆかりはだが、これでも桐条の声が聞こえるようになった方だ。楽しく、他愛ない時間は穏やかにするすると過ぎていった。

「美鶴様、岳羽様。お話し中失礼いたします。美鶴様。そろそろお

時間でございます」
「早っ！　もう時間！？」
「申し訳ございません」
「あ、いえいえ別に早川さんが悪いワケじゃないですから。あ、そだ。また今度組み手してもらえます？　ちょっと強くならないといけなくなっちゃって」
「承知いたしました。私でよければ喜んでお相手いたしますよ」
　既に支払いを済ませてある早川は店の扉を開け、桐条とゆかりを店の外へと誘導する。外には黒塗りの高級車が止まっており、後部座席のドアが運転手によって開けられていた。流れるように座席へと着いた桐条は扉を閉めようとする運転手を制し、ゆかりへと視線を向ける。
「ゆかり。ラボには私から直接電話を入れておくから、早目にラボへ行くようアイギスに伝えておいてくれ。あと、この件に関してはアイギスを通じて私に報告が入るようにしても構わないか？」
「はい。もちろんいいですよ」
「エリザベスさん、だったか。生活費やその他必要な物は前に渡したカードを使ってくれ」
「了解です～」
　桐条は頷くと車へと乗り込む。ふわりとエアコンの風に乗って車内に使われている皮革の香る。「お閉めいたします」と早川は二人に一言断りを入れ、両手でドアを閉めた。期待を裏切らない重厚感溢れる音が低く響く。
　桐条が乗り込んだ後部座席のガラスは車内の様子がまったく分らないほど真っ黒で、ゆかりがいくら目を凝らしても見えるのはガラスに映るゆかり自身の顔であった。見えないな、とゆかりがあきらめかけた時、窓ガラスが音もなく下がって行き、心配そうな桐条が顔をのぞかせた。
「いいかゆかり、くれぐれも気をつけるんだぞ」
「はいはい、分かってますよ。じゃあまた連絡しますね」

「ああ、待ってる」
静かに走り出す桐条を乗せた車。ゆかりは特徴的な長方形のテールランプが見えなくなるまで見送った。

００５：前進の実感

桐条と別れたゆかりは大学へと向かう。歩けなくはないが普通なら電車を選択する距離だ。ましてや今日のゆかりは動くたびに筋肉痛で体中あちこちが疼く。けれどゆかりは歩く事を選択した。

なんとなく歩いてみたかった。特に深い意味はない。あえて言うなら時間的に余裕があった事も、毎日何かしら始まりの予感がしてならない春独特の空気感を楽しみたかった事も理由の一つになるのだろう。町行く人の装(よそお)いが日に日に明るい色合いへとなってゆく様子を見ているだけでゆかりは楽しかった。

「まったく。イッタいなぁ、もう」

軽い段差を超えた時にひときわ大きく響く痛み。笑顔でつぶやくゆかり。

例えば、今まで出来なかった問題が解けるようになった。今まで出来なかった技が決まるようになった。試験で高得点をとった。試合に勝った。そのどれもが努力の結果と成長を実感できるものなのだが、ゆかりにとって遅発性筋肉痛、いわゆる筋肉痛ほど確実で分り易い前進の実感はなかった。

一歩足を前に出すたびに走る痛み。この痛みは回復、成長している証。強くなる事は湊を助ける事へ一歩近づいた証。だからこの痛みこそ前に進んでいる証。そう考えるゆかりからは自然と笑みがこぼれる。

春は別れと出会いの季節。そして終わりと始まりの季節。痛みはあれどゆかりの足どりは軽かった。

歩くこと数十分。梅雨になる前の緑眩しい並木道を通り抜け大学へと到着する。正門をくぐると芝生広がる大きな広場があり、その後ろには煉瓦造りの本館が堂々とそびえ立つ。学校案内でも採用さ

れているこの構図は学生からも親しまれており、入学や卒業など節目の写真撮影や、試合に勝った時や打ち上げなどの記念写真はここで撮られる事がほとんどだ。カメラを構える者が腕を上げていると、写らないよう辺りにいる学生は移動するという暗黙の了解までである。午前最後の講義真っ最中なので人影はあまり多くないが、あと数分もすれば天気の良い今日は弁当を持った学生であふれかえるだろう。

芝生広場を抜けて一号棟一階を抜けて行く。周りを煉瓦の壁で囲まれた廊下にゆかりの靴音が響いた。角を曲がり、学生掲示板が並ぶ一角でゆかりは覚えのある人影を目にした。

「エ、エリザベスさんっ！？」

埃を払うような仕草をしていたエリザベスはゆっくりとゆかりを見る。目が合うやその表情は明るいものへと変わって行く。

「岳羽様。こちらにいらっしゃいましたか」

「『こちらにいらっしゃいましたか』じゃないってば！　どこ行ってたのよ！？　朝ごはんだって待ってたのに！」

「これは大変失礼いたしました。実は私、朝の散歩を思い立ちまして。歩きつつ立ち止まりつつ、なんとも美しい風景に見蕩（みとと）れておりました。ですが、ふと気が付けば全く見知らぬ場所。私は途方にくれました。なおも歩き続けますと岳羽様が通われる学び舎へと偶然たどり着くという僥倖（ぎょうこう）。こうしてお待ちしていた次第でございます」

「お待ちって……迷子！？　って、どこまで歩いてきてるのよっ！？　それなら電話してくれりゃ……あ、携帯持ってないのか」

「けいたいもってない？　……あ、なるほど。あいにく携帯する電話を持っておりません。それに覚えておりますテレフォンナンバーも有里様のみでございます」

「なんで湊君の番号だけ覚えているのよっ！」

「なんで、と申されましても……あの方以外にかける気がなかったとしか」

「この際だから聞いておくけど。エリザベスさんと湊君ってさ。一体どんな関係なワケ？」

「どのような、と申されましても。今ここで申し上げるのも憚(はばか)れるのでございますが……」
「んなっ！？」
恥じらい俯くエリザベス。響くゆかりの声。集まる興味と好奇の視線。
講義中で人が少ないとはいえ、ここは学生へ向けた掲示物が集まる場所。大きな声で言い合っているのは、あの岳羽ゆかりと見知らぬ美女。聞こえてくるのは男の名前。興味を持つなというのは無理な話だ。
ゆかりは自分達に向けられている視線にやっと気が付き、言いたい事を無理矢理飲み込んで別の言葉を捻り出した。
「あー、もう！　いいから行くわよ」
「どこへでございますか？」
「携帯買って服買って。あと、何も食べてないんでしょ？　お昼ご飯食べにいくの！」

大学を出て数分も歩くと携帯ショップにたどり着く。ゆかりと同じキャリアであるこのショップは周りに比べてやや店の規模が大きく、展示されている携帯多いように思えた。
色とりどりの携帯に目を輝かせるエリザベスの「何を基準に選べば良いのでしょうか？」との問いに「見た目！」と即答するゆかり。要はかわいいか否かである。
迷う事三十分。結局エリザベスが選んだのは、スライド式のいわゆる普通の携帯電話だった。白いボディにボタンが青く光る所が気に入ったという。手続きを済ませ、早速００１にゆかりの番号を、００２にはアイギスを、００３には風花の番号を登録する。
「もしもし。こちら、エリザベスでございます。　聞こえますでしょうか？」
「あー岳羽です。聞こえていますよー」
携帯ショップを出て次なる目的地へと歩きながら、ゆかりとエリ

ザベスは隣同士そんなやりとりを行う。通話が終わったエリザベスは満足そうに携帯を握りしめた。
「ところで、なぜ電話なのに呼称が『携帯』なのでしょうか？　例えば、携帯する電話ならば『携電』などの略称がしっくりくるかと私思うのでございます」
「さぁ？　なんとなくケータイって言ってるけど、なんでって改めて聞かれると分かんない。確かに家の電話は『家電』って言うしね。今度風花にでも聞いてみ……る？」
　話をしているのだが目線が合わないエリザベスの視線を辿るゆかり。そこにはいたのは会社員風の男。けたたましい着信音を響かせる携帯をポケットから取り出した。通話を開始するや、電話の向こうにいるだろう相手にぺこぺこと頭を下げる男。その男の横を電話をしながら歩いて行く女子高生。よく見ると路上にいる多くの人が電話をするか、電話を見るかのどちらかであった。
「これは……こうも間断なく満遍なく繋がりを欲するとは。携帯電話という見えない糸を使いし緊縛師。かくも人は縛り縛られたがる存在なのですね」
「なんか違うと思う」
「よく考えますと、これはある意味召喚の儀？　ボタン二つであの方をお呼び出し」
「どの方を呼び出すのよ？」
「興味は尽きません」
「はいはい。じゃあ次は服ね」
　ゆかりとエリザベスが立ち止まった右手には、三体の女性が立っていた。
　左の女性が着ているのは白のワンピース。胸元や袖元にリボンをあしらい、ふんわりとしたフェミニン系だ。
　中央の女性は白のガウン風ロングカーディガンを羽織り、すらりとした長い足が黒のショートパンツからのびている。ちょっと大人なセクシーさを漂わせる。

右の女性が着ているのは淡いピンクのワンピース。膝上１０ｃｍと少し丈が短めで、ややタイトなシルエットはボディラインをはっきりさせるほどではないが、見る者に体の線を想像させる程度には細身だ。かわいらしくも大人っぽい雰囲気が印象的だ。

三体のマネキンはゆかりたちに華麗なポーズを決めてみせている。ゆかりは目を輝かせマネキンを見ていた。むくむくと沸き起こる買い物心。お金の心配ならしなくていい。なぜなら桐条先輩からクレジットカードの使用許可が下りているからだ。

マネキンを見て色々と想像していると、自動ドアが開き店から女の子が出てくる。手には特徴的なロゴが書かれた紙袋。満足そうな横顔を見せ、人混みの中へと消えて行く。

「さぁ、買うぞぉ！！」

俄然気合が入ったゆかり。エリザベスの手を握ると、勇ましく店の中へと突き進んでいった。

一時間に及ぶ激闘の戦果。ワンピース三着。ショートパンツ二着。スプリングコート一着。Ｔシャツ三着。その他数着。もちろん全てエリザベス用である。ショーウィンドウに飾られていた物と同じ、淡いピンクのワンピースを着ているエリザベスと、満足感あふれる笑顔のゆかりは両手に紙袋を持って店を後にした。

「私にはなんの力も感じ取れませんが……しかしなるほど。確かに道行く殿方からの視線を感じます。さしずめ『マリンカリンオート』といったところでございますか。まさか服に魅了を付加するとは。今まで考えもしませんでした。これが『全方向愛されワンピ』の力、でございますね。完全に傀儡となるほどの魅了ではなく、極微弱な魅了を放ち続ける。このような見事な逸品を頂けるとは、なんと礼を言えば良いのでしょう」

「合ってないようで合ってるんだけど全体的に間違っていうか。まぁお礼は美鶴先輩に会った時にでも言って」

笑顔で話すゆかりはかなり機嫌が良かった。自分の服でなくとも

服を買うのは楽しい。だが、あまりに楽し過ぎて予定の時間を大幅にオーバーしていた。本当ならパジャマも下着も靴も買い揃える予定だったが、昼を食べたら即大学に戻らないと間に合わない。
「それより早くご飯食べに行こ。すっかり遅くなっちゃった」
『ねぇねぇ、ご飯食べに行くなら一緒に行かない？』
男の声がした。びくりと体を震わせるゆかり。振り返ると見知らぬ男三人組が立っていた。
「すいません、急いでいるので」
ゆかりは少し震える手でエリザベスの手を握ると足早にその場を去ろうとしたが、黒いジャケットを来た男が行く手を遮る。男はゆかりを上から下までなめまわすように見る。本人は笑顔のつもりなのだろうが、ゆかりには下卑（げび）た笑みにしか見えない。
「さっきご飯食べに行こって言ってたじゃん。奢るからさ、一緒に食べようよ」
「そうそう。で、飯食って気が合ったらカラオケとか行こうよ。あんま乗り気んなれなかったらパスしてくれてＯＫだからさ。そんな警戒しなくても大丈夫大丈夫」
帽子をかぶった男が言葉巧みに畳み掛ける。ゆかりはグっと歯を食いしばり三人組とエリザベスの間に立った。
「ごめんなさい。急いでますので」
「まぁまぁそう言わずにさ。近くにパスタのおいしーとこ知ってるのよ。で、そこって芸能人とかスポーツ選手とかもくるんだけど、知る人ぞ知るって店だからお昼時も空いてるワケ」
「この前、食いに行った時も芸能人とかフツーにいるし。なぁ」
ドラマに出てる誰々が来たとか、サッカー日本代表のあの人が来たとか三人組が盛り上がる中、ゆかりの後ろにいたエリザベスはそっとゆかりの袖をつまみ、唇をゆかりの耳にすっと寄せる。
「殲滅しましょうか？」
「せ、殲滅！？　いやいや殲滅どころか戦わなくていいから。こっちの世界じゃこの程度で戦っちゃダメなの。もうちょいガマンすれ

ば終わるから」
背後からほのかな殺気を感じつつ、ゆかりは心の中でため息をつく。だが、とんでもない一言はゆかりに余裕と冷静さを与えた。
出来れば穏便に済ませたい。こうなったら走って逃げようか。いわゆる腰パンスタイルなこの三人になら追いつかれる事はない。ゆかりはそっと自分の足下を見る。サイドジップのブーツはそうヒールも高くない。エリザベスもブーツだがヒールはそんなに高くなかったはずだ。
機会は三人共こちらから視線を外す時。走って逃げる事を決意したゆかりはエリザベスの左手をしっかりと握る。その時だった。
「おいおい遅いっての。どんだけ待たせるんだよ」
三人組の後ろからやってきた二人組。一人は野球帽をかぶり、ジーンズにミリタリーテイストのショートブルゾンを着た男。顎には少し髭が生えていて、人懐っこそうな笑顔を見せている。さきほどゆかりに声をかけてきた人物だ。もう一人は中学生くらいの男の子。身長は１６０センチちょっとのゆかりと同じくらいで体型は細身。柔らかそうな少し明るめの髪に利発そうな表情。まだあどけなさが残る中、凛々しさと強さを秘めた大きな瞳が印象的だ。
「順平！？　それに天田くんも！」
元特別課外活動部のメンバー、伊織順平（いおりじゅんぺい）と天田乾（あまだけん）がそこにいた。
驚きのあまり思わず立ち尽くすゆかりに三人組は背を向け、肩を怒らせ伊織と天田へ近づく。
「なんだ、テメェ。今オレらがこの子らと話てんだよ。後から来て話しかけてんじゃねーよ？」
「チョビヒゲにガキか。いいからあっち行ってろ。じゃねーといじめんぞ？」
「そうそう。痛いの嫌いだろ？　平和に行こうぜ、平和にな」
割と人通りの多い道の真ん中で顔を必要以上に近づけ、低い声で脅す三人組。伊織は天田の前に立ったものだから、三人組からの威圧を一人で受けていた。伊織は三人の顔を見ながら困った表情を浮

かべ、追従(ついしょう)笑いをする。そんな態度を怯えととったのか、にやつく三人組。伊織は頬を掻く仕草をしながら、言い難くそうに話し出す。
「あー、その……すんません。その二人、俺らと約束してまして。申し訳ないんですがいいっすか？」
「あぁっ！？　何が『いいっすか』だコラ！？　いーワケねーだろうがっ！？」
一番ガタイのいい男が伊織に近づき、いきなり腹を一発殴る。片膝を地面に着ける伊織。殴った事でガタイのいい男に火が着いたのだろう。伊織の顔を蹴ろうと左足を後ろに引く。それを見たゆかりとエリザベスは、伊織を守るべく反射的に動こうとした体を、強引に止めた。蹴ろうしている男を「ここではヤバい」と残る二人が止めた瞬間であり、伊織が手を出すな、と後ろにい天田とゆかりたちを止めた瞬間でもあった。あたりがざわつく。
「チッ、次はこの程度で済むと思うなよ？」
通行人はとばっちりを受けないよう、なるべく目を合わせないようこの騒ぎを覗き見ていたのだが、言い争いから片膝を地面に着いた状態までになると集まる視線の数が跳ね上がる。さすがに周囲の目が気になったのか、ゆかりに声をかけてきた三人組は定番じみたセリフを残しその場から去っていった。
「天田。あいつら見えなくなった？」
三人組が去って数十秒。伊織は天田に問い掛ける。
「大丈夫ですよ順平さん。もう見えないですよ」
「そっか」と答えると、片膝を着いていた男は何事もなかったかのように立ち上がりブルゾンとジーンズについたの埃を払いながらゆかりへ笑顔を見せる。
「よ、久しぶりだなゆかりッチ」
「ちょっと順平、久しぶりじゃないでしょ！？　大丈夫なの？」
「あ、こんなんへーきへーき。軟球当たった方がよっぽど痛いっつーの」
「な、軟球？」

「前に言ったろ？　オレッチってば大学で野球サークル入ってんだぜ。もち筋トレとかもしているからさ、マジで素人のパンチなんて大した事ないって」
　腹をバンバンと叩く伊織を見て、そういえば、聞いた事あるような、と深く埋もれた記憶を掘り起こす。「平和に終わるのが一番だろ？　まぁ、んな事よりとにかくメシでも食おうぜ」と、伊織は目の前にあるハンバーガーショップへと歩き出した。

　さっきのお礼代わりにと全員分の支払いを申し出たゆかりは、レジで商品待ちの小さな旗を受け取り混雑する店内を見回す。伊織たちが先に席を確保してくれているはずだ。
　この階にはいないのだろうか、とゆかりが思いはじめた頃、喧噪の中、不意に覚えのある声が耳に届く。数年前まで毎日のように聞いていた笑い声だった。ゆかりを見つけた伊織は大きく腕をぶんぶん振り、窓際のテーブル席に陣取っている事を知らせる。ゆかりは表情を緩め、席へと向かった。
「しっかしさ。別に礼なんてマジよかったに」
　ゆかりが席に着くや伊織は感謝の意を込めながらも笑いながら話す。ゆかりは思う。ああ、やっぱ順平は変わったな、と。昔の伊織なら「え？　マジで？　ラッキー！」とでも返しただろう。いや、そもそもあんなに堂々とした態度で助けに来なかったかもしれない。
　特別課外活動部にいたメンバーは皆、様々な苦難を乗り越え、確執を乗り越え、そして相克を乗り越えてきた。出会った頃と別れた頃とでは別人のように成長している。
　強さという点では間違いなく湊が一番成長しただろう。風花もそうとう変った。穏やかな性格はそのままに今ではきちんと自分を持ち、自らの意志で前を向いて歩いている。目の前で父親が凶弾に倒れるという悪夢から立ち直り、父親の意志を継ぐと決心した桐条は、グループが背負った負の遺産に敢然と立ち向かっている。機械の乙女でありながら心を見つけたアイギスは、人と機械との間で今も命

の答えを探し続けている。そんな中、ゆかりが思う最も成長した人物は伊織順平であり、最も大きな壁を乗り越えた人物は天田乾だった。

ゆかりにとって伊織は最も気を使わなくて良い男子だ。異性としての意識は皆無。かなりキツイ冗談も言えるし、気兼ねなくツッコミを入れる事が出来る。バカで、お調子者で、小心者で、頼りなくて自分勝手なやつ。それがゆかりにとっての伊織の印象だった。

ゆかりや伊織が高校二年生だった二〇〇九年十一月。一人の女性の死が伊織を決定的に変えた。伊織がその女性を好きだった事はゆかりも知っていた。だがそこまで好きだったとは知らなかった。彼女の死後、声をかけるのもためらうほど落ち込んでいた伊織だが、彼女がどれだけ伊織を気にかけていたかを知り、彼女が救ってくれた命を大切にしなくてはいけない、と涙をぬぐった。

それからの伊織は変った。お調子者なところとか、小心者なところも相変わらずあるのだが、なにかが変わった。ゆかりにとって初めて見る、人が精神的に成長する瞬間だった。

お調子者で。バカで。ちょっと頼れる男。それが今の伊織の印象だ。

「で、どーよ中学校は？　小学校とは全然違うだろ？」

伊織は隣に座る天田に話しかける。

「そうですね。入学前はすごい大人なイメージでしたけど、実際は全然子供というか。やはり高校生の方が大人だなって思います」

「お、それ分かる分かる。高校生になったらなんでも出来そうな感じ？　まぁ実際はそうでもないんだけどな」

中学生らしからぬ落ち着きを見せる天田。ややくせ毛で柔らかな髪は耳が隠れる程度の長さで揃えられている。小さな顔に大きな瞳。小学生当時のかわいらしい面影はそのままに、時折見せる少し影のある笑顔が大人っぽさを感じさせる。オレンジのパーカーは今もお気に入りのようで、爽やかに着こなしていた。

天田との出会いはゆかりにとって驚きの連続だった。そもそも小学生が特別課外活動部に入った時点で驚いていたが、小さな両手に

槍を持ち、ゆかりたち高校生に勝るとも劣らない動きを見せた事には心底驚いた。
それよりも、何よりも驚いたのは、ゆかりや伊織が中学三年生だった二〇〇七年の出来事を聞かされた時だ。ある事故に巻き込まれ、天田の母親は命を失う。その事故というのが当時の特別課外活動部メンバーによるペルソナの暴走事故だった。
誰のペルソナが暴走したのかを突き止めた天田はある満月の影時間、母親が事故に巻き込まれた場所にその男を呼び出す。ゆかりたちが特別課外活動部として、とある作戦を行っている真っ最中だった。
結論から言えば、天田の母親を事故に巻き込んだ男――特別課外活動の一員である荒垣真次郎（あらがきしんじろう）は死んだ。だが天田が復讐を遂げた訳ではない。特別課外活動部を疎ましく思う男が撃った銃弾から、荒垣が身を挺して天田をかばったからだ。
親が事故に巻き込まれ死亡する、その気持ちは父親を事故で失ったゆかりにはなんとなくだが想像出来る。だけど二年もの間、途切れる事無く復讐の炎をたぎらす事や、自分をかばったが為に目の前で人が死んでしまう重さなど想像も出来ない。しかものしかかるのは小学五年生の小さな肩だ。それはどれほどの重さなのだろう。
けれど天田は見事に立ち直った。何を思ったのか詳しくは知らない。何がきっかけだったのか詳しくは分からない。ゆかりに分かったのは、天田は荒垣を許し、荒垣の分まで生きていこうとしている、という事だけだ。
「伊織様も岳羽様と同じく『大学生』をされていらっしゃるのですか？」
「だーかーらー。オレッチの事は順平って呼んでくれって。ゆかりッチからも言ってよ。エリちゃん、どうしても『様』ってつけるんだよ」
伊織の一言にゆかりは呆れた表情を浮かべる。決して本気で呆れている訳ではない。二年前まで毎日のようにあったこれがいつもの

自然な流れ。いわばお約束であった。失って初めて気付くのは、案外一番大事な物ではなく、自然とそばにあった物なのかもしれない。ゆかりの口からはすらすらと言葉が流れる。
「そうそう。順平に『様』なんて付けなくていいって、てか、その『エリちゃん』ってのは何？」
「ほら、アイギスの事アイちゃんって呼んでたじゃん。で、エリザベスだからエリちゃんって事で」
「全くこの男は。エリちゃんってどんだけ慣れ慣れしいんだか。……でも『ベス』よりはしっくりくるかな。ねぇ、私も『エリ』って呼んでいい？」
「『エリ』でございますか？　もちろん構いませんが」
首を傾げながらも肯定するエリザベス。その様子を見て、もしかしたらいままで略称で呼ばれた事などないかもしれない、とゆかりは思った。それならこれは良い機会だ。
「その代わり私の事はゆかり。順平の事は順平と呼んでね。以後『様』付け禁止！」
少し困惑顔のエリザベス。ひとしきり会話が落ち着いたところでゆかりは気になっていた本題を切り出した。
「ところでなんでこんなトコいたの？　まさか偶然って事はないでしょ？」
「あ、それそれ。実は桐条先輩から連絡があってさ。湊を助けに行く計画があって、ゆかりッチやアイちゃんがなにやらやってるって。ったく、驚いたっての。なーんでオレッチや天田に声をかけてくれねーんだよ」
「あ、ゴメン。そのうち連絡しようとは思っていたんだけど。てか、よく考えたら具体的にはまだなにも出来てないっていうか……」
「あれ、そうなの？」
「うん。一昨日エリザベス……エリと会って、で昨日エリと手合わせして。今のままでは力不足だからモナドっぽいとこ行って鍛えようってのが今日の夜で。だからまだ具体的に何かをしたっていうよ

り、作戦前の準備段階って感じ？」
「じゃあちょうどいいじゃないですか」
「なにが？」
笑顔の天田にゆかりは考えることなく疑問をぶつける。
「僕たちも湊さんを助けるって事です。僕、あの日から毎日槍の練習をしてきました。あの頃の僕とは違います。今度こそ皆さんの力になれるはずです」
「モナドっぽいとこに一緒に行くのは全然構わないの。だってどうせ強くならないとダメだし。でもね、その先は私とアイギスと風花、エリの四人でやろうと思ってる」
「な、なんでだよ！？」
驚く伊織。ゆかりは伊織と天田の顔を交互にじっと見つめた後、少し顔を曇らせ小さく息を吐く。
「……もしもね。もしも私が失敗したら。その時は順平や天田君にお願いしたい。だってモナドより過酷ってどんだけよ？」
伊織と天田は互いに顔を見合わせた。二人ともモナドの恐ろしさは身に染みて知っている。あの時モナドの過酷さについていけたのは湊ただ一人で、ゆかりも伊織もアイギスさえも四十分程しかモナドにいられなかった。原因は過酷な戦闘の連続で体力、気力があっという間に底を突いたからだ。モナドに一時間もいることが出来たなら、世界でもトップクラスのペルソナ使いだといえる。そのモナドより過酷な状況。モナドという十二分に恐怖できる比較対象がある伊織や天田にはゾッと出来る話だ。
「絶対、絶対湊君を助けたい。出来たら、私の手で助けたい。でも、私の手で助けるのが大事なんじゃなくて、湊君を助ける事が大事なの。で、見知らぬトコに見知らぬ敵がいるワケじゃん。そんなとこ全員で行ってもしも全滅なんてしたらシャレになんないでしょ？だからまずは私達が先に行って色々情報を集めてくる。で、成功すればそれで良しよね」
特別課外活動部として活動していた二年前。メンバー八名と一匹

全員で現場に向い、状況に応じて人選をしていた。基本は四人＋ナビゲーション役の風花。なぜ四人かというと、風花が余裕を持って確実にサポート出来る人数である事。タルタロスの通路で戦うには広さに対してちょうど良い人数だった事。そしてこの人数で戦い慣れていた事が主な理由である。残るメンバーは現場近くで待機。不意のアクシデント対応やナビ役の護衛など、決してただ待っている訳ではなかった。

「でもね。もし私達が失敗した時はお願い。順平や天田君。真田先輩にコロマル。それに美鶴先輩に後を託す。絶対湊君を助けて欲しい」

「ゆかりッチ……」

なにかあった時、すぐに救出に向えるよう現場近くに待機しているのが正しいのか。それとも全滅を避ける為、先遣隊以外は現場より離れ、情報を得る事に集中している方が正しいのか。それすらも分らないゆかりは、エリザベスや風花、そしてアイギスと相談の結果、とにかくまず見てみよう。エリザベスですらよく分らない所に全員で行っていきなり全滅したらシャレにならない。もしもの場合は、アイギスを通じて桐条へ流した情報を分析し、対策を施してから第二陣を送り込む方が湊を救うという点で考えると妥当なのではないか、との結論に至った。

それに先遣隊だって決して弱いメンバーではない。桁違いの強さを誇るエリザベス。最強のペルソナ使いアイギス。そこにペルソナが進化したゆかりが加わるこの戦力は、当時の特別課外活動部エース級四人パーティと戦ったとしてもなんら遜色はないだろう。

「そうか。分かった。まぁゆかりッチがそこまで言うなら待ってるわ。暴走して突っ走ってるワケじゃあなさそーだし。でも今日のモナドっぽいとこでの鍛錬ってのには行ってもいいだろ？」

伊織は何か言いたげな天田をそっと目で制し、ハンバーガーを食べているエリザベスを見る。一拍おいて、話を振られた事に気が付いたエリザベスはこくりと頷く。ゆかりはなぜかホッとする。氷で

少し薄くなったコーラを飲んだ。
「で、どこに行くの？　というかオレッチや天田は何時にどこに行けばいい？」
ハンバーガーを食べ終わったエリザベスは、唇についたソースを紙ナプキンで拭い姿勢を正す。
「はい。今夜〇時に岳羽さ……」
「ゆ　か　り　！」
「はい。今夜〇時にゆかり……の家より向かいます。どうぞ心してお越しくださいませ」
エリザベスはいつもの無表情ともポーカーフェイスとも言える顔で答えた。

００６：別世界の現

エリザベスは文字通り別世界の住人だ。彼女がいたベルベットルームは、夢と現実、精神と物質の間（はざま）と呼ばれ、様々な世界と繋がっている。当然ゆかりたちがいる世界とは理（ことわり）が異なり、ゆかりたちの常識では考えられないような物も多々存在した。

その一つがアレーテイア（真理への道）と呼ばれる広大な地下迷宮（ダンジョン）。最奥へたどり着けば真理に触れる事が出来ると言われる地下迷宮は不可思議な力で満ちており、その力は深層になればなるほど濃くなっていく。深い階層では神話級の力を秘めたアイテムや武器が手に入る事もあった。

なぜこのような武器や防具があるのか？

はっきりとした答えは見出せていないが、志半ばにして散っていった挑戦者が持っていた武器や防具、道具類が地下迷宮の力に影響され、強大な力を宿したのではないかと真しやかに囁かれている。いずれにせよ真実は誰も知らない。

進めば進むほど真理へと近づく地下迷宮。当然何も障害がない訳がない。深層になればなるほど凶悪なる異形が跋扈（ばっこ）し、地下迷宮は苛烈になっていく。必然この地下迷宮に挑む者たちは皆、相応の実力者であった。

自分は何者なのか。その答えを求めていたエリザベスも、かつて最奥へと挑戦した一人であった。

午後十一時四十分。場所はゆかりたちが住むハイツの一階部分である集会室。アレーテイアに挑むべく集まったのはカーキ色のカーゴパンツに茶色のブーツ、黒と白のチェックのパーカーという出で立ちのゆかり。

白いボディ。肩や足の付け根辺りは金色のパーツ。腕には機関銃

のマガジンがセットされていて、首元に大きな赤いリボンという機械の乙女本来の姿で臨むアイギス。
　エリザベスは袖の無い濃い青のワンピースに黒のタイツ。足元は服と同じ色のロングブーツ。いつもの服装だ。
　ナビゲーター役である風花は淡い緑のカーディガンに黒に近い色目のパンツ。
　野球帽をかぶった伊織は濃い目のジーンズにミリタリーテイストのショートブルゾン姿。すぐそばに大きな剣を立て掛けている。
　天田は黒のダウンベストにオレンジのパーカーを合わせ、下は黒のパンツにスニーカー。手には身長より長い槍を持っていた。
「で、エリちゃんは何階まで行ったの？」
　アレーテイアについての説明を一通り受けた伊織は、誰もが疑問に思っていた事をエリザベスに質問をする。
「３９７階でございます」
「さ、さんびゃくきゅうじゅうなな？　え？　マジで？」
「ちょ、それってタルタロスよりおっきいじゃん」
「そ、それでモナドより敵は強いんですよね？」
　予想外だったのか、上ずった声を上げる伊織。目を丸くして驚くゆかり。焦る表情を見せる天田。タルタロスより厳しい事を想定していたアイギスは声を出す事こそなかったが、この戦力で皆が無事で勝利出来るのか一抹の不安にかられる。そんな中、思案顔だった風花がエリザベスに質問をする。
「あの……アレーテイアって何階まであるの？」
　風花の言葉にハッとした表情を見せる一同。なんとなく言われた階数が最下層だと思っていたが、エリザベスは最下層まで行ったなどと一言も言っていない。
「私の姉が４９６階まで行っておりますが、残念ながらまだ最下層の片鱗すら見えておりません。遥かなる太古の記録では８１２８階まであったと記されております」
　エリザベスは大した事ではないかのように澄まし顔で答えた。

やはり最果ては途方も無い。だが最も大切なのは最下層が何階なのかではない。アイギスはエリザベスに疑問を投げかける。
「それで私たちはいつまでに何階まで踏破する事が目標なのですか？」
「はい。一ヶ月の間に四人で２０階踏破が理想でございます」
四人で、と言うあたり、エリザベスは単独で３９７階まで踏破したのだろうとアイギスは推測する。目標を達成してなおエリザベスとの戦力差は相当ある。知らずアイギスは両のこぶしをぎゅっと握っていた。
人の心を手に入れたとはいえアイギスは対シャドウ兵装。異形に勝利する事にこそ存在意義があると認識している。人の心はアイギスに仲間を守る事を単なる命令から自らの願いへと変化させたが、同時に勝利への欲求が芽生た。
強くありたい。みんなを守れるだけの力が欲しい。自分の為に力が欲しい訳ではない。世界で一番強くありたいとは考えていない。敵より強ければそれで良い。仲間を守る。純粋ゆえにその心は美しくも脆い。エリザベスの強さにアイギスは心を騒がせていた。
「戦いへと赴く前に皆様にお渡ししたい物がございます」
エリザベスは弓を取り出した。五尺七寸（１７３センチ）の屈曲形短弓。いわゆる一本の棒で出来た和弓ではない。持ち手の部分とその上下に弓のしなる部分がある構造で、派手な装飾こそ無いが随所に意匠を凝らしている。淡く光り放つ黄金の弓はその姿とも相まって、ただならぬ存在感を漂わせていた。
ゆかりはエリザベスから弓は受け取る。驚く事に弓は音もなく左掌（てのひら）の中へと吸い込まれるように消えた。
「えっ！？　ちょっと何これっ！？」
「太陽神ヴィシュヌの権現、ラーマが持つと伝えられる光の弓サルンガの名を冠する弓でございます。どうぞ心の中で弓をイメージし、弓が現れたら弦をお引きくださいませ」
ゆかりの左手から淡く輝く光と共に先程の弓が現れる。驚きを隠

せないままゆかりは恐る恐る右手で弦を引くと、今度は光り輝く矢が現れた。ゆかりから少し離れた場所に立つアイギスにまで弓矢が放つ尋常でない力の波動が伝わる。
「うそ、これすごい……」
「慣れますと素早く弓を出せるようになるかと。矢は弦を引けば無限に現れ、一度に複数射る事も可能でございます。全ては射手の意志次第でございます」
続いてエリザベスは伊織に白銀の剣を、天田に黒色の槍を手渡す。
「山岸様には……」
「あ、ごめんなさい。私はいいです。後方支援が主なので戦いに参加する事はないですから」
風花の言葉を聞いてエリザベスは少し首を傾げるが、それも一瞬。すぐにいつもの顔へ戻る。
「左様でございますか。ではまた別の物をご用意いたします。アイギス様には良い武器が見つからなかったので、こちらをお受け取りくださいませ」
「これは？」
「周囲の気を吸い取り、装者へと還元する札でございます。還元しますのは心の力。つまりペルソナ召喚やスキルの行使に必要な力が一定時間毎に回復いたします」
以前のアイギスは十指に仕込まれた機関銃を駆使し戦うスタイルだったが、ワイルドの力を手に入れてからは複数のペルソナによるスキルの行使がメインの戦闘スタイルになっていた。当然、ＳＰ（スキルポイント）の消費は格段に多くなる。
アイギスはエリザベスから銀色の札のような物を受け取る。着けてみると小さな力ではあるが体を巡るのを感知した。
パラメータを確認すると、確かにＳＰが回復している。なるほど、これは助かる、とアイギスはエリザベスに感謝した。
皆が手渡された武器を見る中、エリザベスは右手を上げ目を瞑り何かつぶやく。アイギスのセンサーはそれを捉えたが、言葉に置き

換える事が出来ない音であった。恐らく呪文かなにかだろうと結論付けたアイギスは、注意深くエリザベスを見ていた。
　しばらくすると右手を下ろし、目を開く。一拍の間をあけ、突然大きな扉が煙と共に現れる。ハイツの一階である集会室は気の弱い者なら気絶しそうな異質の緊張感で満たされ、防弾性に優れた強化ガラスが小さく軋む。タルタロスやモナドなど異界へ踏み込んだ時と似たような感覚。センサーでは具体的な数値として表れないが、アイギスは空気が変わった事を敏感に感じ取った。
「この扉の向こうが『アレーテイア』。真理への道でございます。皆様、考えうる最上の覚悟をお済せでしょうか？」
　見上げる程大きな暗い黄緑色の扉。左手に碧く目が光る虎。右手に紅く目が輝く鷲。縁には蛇を象った飾り付けがなされ、葡萄の枝と実が彫られている。重厚感漂う威風堂堂とした扉は見る者に畏怖の念を抱かせる。
　この扉は開けてはならない。アイギスは直感的にそう感じた。それほど扉からは圧倒的な畏れが溢れ出ていた。
「マ、マジかよ……」
　絞り出すように漏れた伊織の声。言葉も出ないといった様子の天田。風花とゆかりは呆然と扉を見上げている。そんな四人を気にする様子もなくエリザベスは扉に手を掛ける。低い音と共に扉はゆっくりと開いていった。

　扉の先は石造りの回廊だった。壁がほのかに光っているので真っ暗ではないのだが、数メートル先が見えない程度の薄暗さ。天井がどれほどの高さか確認できないが、道幅は割と広く四メートルはある。粘り気のある何かが纏わり付く様な感覚。ツンと鼻につくすえた臭い。耳を澄ますと遠くから咆哮が聞こえてくる。空気の成分を調査しようと情報を集めるが、何度試みても『ｅｒｒｏｒ』と返された。アイギスはちらりと隣にいる風花を見る。頷く風花。ちょっと調べてみますね、とペルソナを召喚し、辺りを探り始める。

「一階はさほど広くありません。一時間もあれば地下へと進む事が出来るかと存じます」
「え？　広くなくてワンフロア一時間？」
　ゆかりの言葉にアイギスも少なからず同意する。タルタロスは広いフロアでも二十分そこそこで次の階へと進む事が出来た。その点はモナドも似たような物だった。広くなくて一時間。階層が深くなればなるほどフロアは広くなるだろうから、滞在する時間はどれほどのものになるのだろうか。アレーテイアからの離脱方法と復帰方法をエリザベスに確認しようと思ったその時だった。
　アイギスの意識内で警告音が鳴り響く。『ｎｏ　ｍａｐ』と表示され現在位置の詳細は出ないが、シャドウ反応を示す赤い点が二つ明滅する。直線距離にしておよそ三十メートル。後ろを振り向くと、風花は緊張を張り付かせた表情で意識を集中していた。すっと後ろに身を引いたエリザベスは、右手を胸に当て四人に告げる。
「私は戦いに参加いたしません。皆様でこの迷宮を踏破していただきたく存じます。ただし死に至ると判断した場合はこの限りではございません。どうぞ皆様、ご武運を」
「え？　突然何を言って……」
『シャドウ反応！！』
　伊織の言葉を掻き消すように風花の声が迷宮に響く。背後は扉。前は見える限りは真っ直ぐな一本道。現れるとしたら前方から。伊織は混乱しつつもエリザベスから受け取った剣をまるで野球の打者のように構える。天田は槍を体に馴染ませるようにくるくると回した。ゆかりは召喚器を片手に身構える。
「前は私が。天田さん順平さん続いてください。ゆかりさんは援護をお願いします。風花さん、アナライズ結果をみんなに知らせてください！」
『は、はい！　こちらに向かっているのはアルカナ刑死者、混沌のキュクロプス。二体です！　氷結系は吸収、光と闇は無効。氷結系（ブフダイン）、広域万能系（メギドラオン）、物理系（ゴッドハンド）を使います。最強クラスのシャドウです。最大

の注意を払ってくださいっ！』
「おいおい、いきなり混沌のキュクロプスかよっ！」
焦りと恐怖がにじむ伊織の声。ゆかりも天田もその名に覚えがあるのだろう。見る見る間に表情は強張って行く。
『来ますっ！！』
風花の声。そして訪れる一瞬の静けさ。聞こえるのは微かに通る風の音と仲間の息づかい。ごくりと唾を飲む音がする。
仮初めの静寂の中、アイギスはペルソナか機関銃かどちらで攻撃を仕掛けるか思案する。風花のアナライズにより敵の正体と属性は分かっている。ならばより大きなダメージを与えられるペルソナのスキル攻撃が良い。伊織が追い打ち出来るように火炎系スキルがいいだろう。結論が出たアイギスは意識を集中し、アルカナ愚者　スサノオから炎の使い手へとペルソナを付け替える。
やがて暗闇から何か重い物を引きずるような音をセンサーは捉える。空気は突き刺さるように鋭くなり、人ならば吐き気がするほどの緊張が充満する。荒い息遣いと、落ち着こうとする息遣いが混じり、響く。アイギスの隣にいる天田の額から一筋の汗が流れていた。
まず最初に見えたのは巨大な輪っかだった。３メートルはあろう輪の外周には人の頭ほどの大きさのトゲがあり、輪の中心には人型の何かが逆さに吊られている。人型の顔はアルカナ刑死者を示す面が付けられていた。間違いない。混沌のキュクロプスだ。
「先手必勝っ！　ペルソナ、レイズアップ！！」
混沌のキュクロプスの全容が見えるや、アイギスは迷う事なく四大天使長が一人、「神の炎」を意味する名を持つ懺悔の天使、アルカナ塔　ウリエルを召喚する。アイギスの背後に現れたウリエルは純白の翼を羽ばたかせ、金色の髪を揺らしながら両手を広げた。右手に持つ焔の剣が煌めく。
「はッ！」
アイギスの声と共に巨大な炎流が現れ、通路もろとも二体の混沌のキュクロプスを紅く呑み込む。

「うぉぉぉぉぉーっ！　ペルソナァァァ！」
スキルを放ったウリエルが消えるのと入れ違うように現れたのは、伊織のペルソナ、アルカナ魔術師　トリスメギストス。鳥のような顔。くちばしで赤く光る賢者の石をくわえ、金色なる三対の翼を持つ古代エジプト錬金術の神。トリスメギストスは直線的なシルエットの赤い体を翻しを炎塊を投げつける。
数歩下がり間合いを取り直したゆかりはマリアを召喚。炎に包まれている混沌のキュクロプスへ豪風を招く。逆巻く風は爆ぜる炎を更に荒ぶらせ、その勢いはまだ見えぬ天井すら焦がさんばかりだった。
広域火炎系上位スキル、『マハラギダイン』。火炎系上位スキル、『アギダイン』。そして広域疾風系最強スキル、『マハガルダイン』と三種のスキル連続攻撃。並のシャドウならば二度は屠(ほふ)れる威力だが、さすがと言うべきか当然と言うべきか炎の中でまだうごめく姿が見て取れる。アイギスは炎の中から飛び出してくるであろう混沌のキュクロプスに備え、左手に仕込まれた機関銃を構えた。
その予測は正しかった。赤い海を割るように飛び出してきた混沌のキュクロプス。アイギスは左手を突き出し狙いを定める。だが出来ていない予測があった。突如割り込む警告音。中止される発射命令。蒼い瞳のセンサーが黒い影を捉える。
周囲の景色が揺らぐほど温度が急上昇する中、大粒の汗を流し疾走する天田。混沌のキュクロプスが炎の中から出てくるや、猫科の動物の如く音も無く飛び込む。跳躍の頂点。天田にとって身の丈の数倍はある逆さに吊られた人型の足に一撃。返す槍で胴を薙ぎ、着地と同時に頭部を突く。攻撃を終えた天田はちらりとアイギスを見ながら素早くバックステップで距離を取る。アイギスは突きだした左手に今度こそ発射命令をくだした。五本の指から放たれる弾丸。薬莢(やっきょう)が次々と排出され落ちていく。機関銃が火を吹き発射音が響く中、アイギスは残る一体の位置確認を意識した。警告が鳴る。
＞直上より攻撃判定。被弾まで残り０．４秒。

＞回避不可。→詳細。
＞防御姿勢移行可。→詳細。
＞ペルソナチェンジ可。→詳細。
＞回避スキル使用不可。→詳細。
＞推奨対応。審判　ルシファーへチェンジ。クロスアームブロック（腕を十字に構え防御）でガード。
アイギスの意識内で目まぐるしく脅威警告が流れた。一瞬のタイムラグも無く推奨対応を選択する。意識はペルソナチェンジへ集中し、審判　ルシファーへと付け替える。耐久力数値が一気に上昇する。一方、体の動きは自動だ。選択された瞬間、アイギスの意志とは関係なく事前にプログラミングされた動きを再生する。ペルソナの付け替えは０．３５秒後。クロスアームブロックは決定からわずか０．１５秒後だった。
混沌のキュクロプスが繰り出したのは打撃系スキルランク８、『ゴッドハンド』。乗用車ほどもある大きな金色の拳がアイギスの頭上より轟音を伴って落ちて来る。防御姿勢移行完了から０．０５秒後、機体の芯を突き抜けるような外力が襲った。衝撃は腕から肩、そして背中、さらに下半身へと伝達する。装甲は威力により一瞬歪み、負荷は機体の弱い部分――駆動部分や間接部分へと収束してゆく。
＞損傷状況確認。
＞右前腕部　深刻なダメージ。
＞右上腕部　深刻なダメージ。
＞左前腕部
＞左上腕部
＞右大腿部
＞右下腿部　軽微な損傷。
＞左大腿部　深刻なダメージ。
＞左下腿部　深刻なダメージ。
「くっ！」

意識としては予想を超える衝撃。システムとしては想定範囲内の攻撃。敵が沈黙したか確認もせずに次の標的に意識を移した甘さが招いた被弾。混沌のキュクロプスの耐久値がモナドとは違うのかと理由を推測しアイギスは己の軽率さを反省した。

攻撃を受けて４秒。拳の圧力が消える。攻撃をしのぎ切ったアイギスは自動で行われる損傷状況確認をチェックしながらも意識はペルソナへと集中させる。

＞機体損害率２３％。作戦行動続行可能。

＞ペルソナ　審判　ルシファー　スタンバイ。

損害率２３％。それは同じ攻撃をあと二回“防御”すれば戦闘不能に陥る事を意味する。ここで決めなければならない、とアイギスは眼前のシャドウ消滅に優先事項を上書きする。

「召喚シークエンス！」

アイギスの呼びかけに応えたのは神への反乱を起こした天使ルシフェルの堕天した姿。七大罪が一つ「傲慢」を司る悪魔の王、アルカナ審判　堕天使ルシファー。かつての白く輝く六対の翼は黒い縁取りに紅い皮膜の翼へと変わり、放つオーラは白く優雅で神々しいものから黒く蠢く禍々（まがまが）しいものへ。天界随一の美形は悪魔の王と名乗るにふさわしい形相へと変貌していた。ルシファーは左手をすぅっと静かに上げて、そっと下ろした。

見えざる割断の刃。斬撃系スキルランク８、『ブレイブザッパー』。中央から真っ二つに斬られた混沌のキュクロプスは徐々に存在があいまいになっていく。初めは輪郭から。そして輪郭から近い部分から次第に揺らぎ、もはやこの世界に存在し続ける事が出来なくなった混沌のキュクロプスは輪の部分から黒い塵となり霧散していく。

「やったか？」

「油断しないで順平！　もう一体来るっ！」

気の緩みを鋭く察したゆかりは視線を炎の向こうに向けたまま伊織に警告をする。もう一体の混沌のキュクロプスには最初に行ったアイギスとゆかりの全体攻撃以外にダメージを与える事が出来てな

い。つまりあと伊織のアギダイン、天田の三連撃。そしてアイギスの機関銃による攻撃、さらにブレイブザッパー程度のダメージを与えなければならない。アイギスはもう一度ペルソナの召喚態勢へ。伊織も召喚器を構え、引き金に指を掛ける。天田は炎から出てくる瞬間を狙うつもりなのか態勢を低く槍を構える。

「私からいく」

ゆかりは短く皆に告げると左手から黄金の弓を出す。ぎりぎりぎり、と弦を引き絞り輝く矢が生み出される。矢が狙う先――　低く唸るような風が炎を掻き消し姿を見せた混沌のキュクロプス。ゆかりの指が矢から離れようとした時だった。

突如揺れる迷宮。舞い上がる砂塵。何か硬いモノが肉塊を叩き付けたような音が昇る砂煙の中で聞こえる。ゆるやかに戻る視界。アイギスの蒼い目が景色を捉えた時にはそこにいたはずの混沌のキュクロプスは跡形もなく消えていた。

「え？　な、なに？」

「だ、誰か攻撃したのか？」

「僕じゃありませんよ……」

『だ、誰も攻撃してないはずです』

あまりにも突然終わってしまった戦闘。不可解な結末。少し離れた所から戦闘を見ている風花がそう言うのなら、結論は「誰も攻撃していない」なのだろう。アイギス、ゆかり、伊織、天田の四人はこの場にいる最後の一人、エリザベスへ顔を向ける。皆の視線を受け、エリザベスは凍るように美しい笑顔を返し、形の整った唇を静かに開いた。

「どうやらやっと現れたようでございます。皆様、肩慣らしはここまで。これよりが本番。現れたるこの敵こそ今宵の試練。どうぞくれぐれも油断無きよう」

高校時代のゆかりは遠距離からシャドウを討つスタイルだった。弓道部であったゆかりは戦闘時においても射の基本動作である射法

八節に則り、弓を引く。射法八節はシャドウに向かって両足を踏み開く『足踏み』から始まるので当然立ち止まっての攻撃となる。動きながら矢を放つなど決してしない。必ず立ち止まって両足を踏み開く動作から攻撃は始まる。

伊織は高校時代は部活に所属していない。シャドウとの戦闘時には幅広の剣（ブロードソード）を使うが剣術を習っていた訳でもなく、完全な我流だった。構えがまるで野球のバッティングフォームなのは、伊織が昔野球をしていたからだ。そのスタイルは渾身の一撃大振り。まるでホームランを狙うかのようなスイングで斬りかかる。当たれば大ダメージ。外れたら致命的な隙だらけというなんとも不安定な剣技だった。

ゆかり、伊織が高校生の頃、天田はまだ小学生。身長も低く、体力も筋力も年相応だった。槍を選んだのも短いリーチを補う事が出来る事がもっとも大きな理由である。伊織と同じく完全な我流。ただ、元々器用だったのか、それとも強くなりたいという意志が成長を促せたのか、攻守にわたり華麗な槍捌きを見せる。が、いかんせん軽かった。

けれど戦いの日々は彼らを戦士に変えていった。我流ながら実戦で少しずつ磨き上げられ、ついには鈍いながらもメッキではない本物の輝きを放つようになる。尋常ではない異形を相手に奇跡と評される勝利をつかみ取るほどの能力を得た、そんな彼らがこれから挑む相手。

「ご武運を」と締めくくり、後ろに数歩下がるエリザベスへ質問を返すより先に、漂う空気がこれから決して穏やかではない何かが始まろうとしているのを感じさせる。もし空気が目に見えるなら、きっと絶望と悪意をないまぜにしたねっとりと粘着質な黒だろう。アイギスは敵とゆかりらとの間になるようし立ち位置を左に二メートルずらし、静かに十数メートル先の闇を凝視する。まだ見ぬなにかが混沌のキュクプロスを一撃で倒したと考えるのが妥当か。

アイギスのセンサーを持ってして捉えきれない速度の攻撃。ここは保有する最大の攻撃を持って先手を打つべきか否か。だが、結論が出る敵は闇からその姿を現した。
鋭く天を突く二本の角。紅く光る眼。裂けた口からのぞく鋭い牙。山羊の頭。床に垂れる尻尾。引き締まった細身の体躯は人間の倍ほどの大きさで赤黒い肌は鉄を連想させる。腕は人間の胴体より遙かに太く、隆々と逞しい。アイギスたちにとって初めて遭遇した敵。だけどこの場に居合わせた全員が同じ事を考える。
「悪魔……」
悪魔の姿も見た事がない訳ではない。幾種類ものシャドウと相対し、果てはニュクス、エレボスといった超常現象とも言える存在と戦ってきた。先ほどアイギスが召喚した悪魔の王ルシファーを初め、世界の名だたる悪魔を彼らは見た事がある。
たが、見た事があるだけだった。いくら悪魔の姿をしていてもペルソナである以上、根幹はもう一人の自分。困難に立ち向かう為の仮面であり鎧。そして剣である。それが神や悪魔の姿で顕現しているだけだ。ここに現れた悪魔とは存在が異なる。雰囲気が異なる。そしてなにより恐怖が異なる。今の彼らは明らかに恐怖している。自分たちがあれほど苦戦していた相手を一撃で粉砕したからではなく、ただその存在に対して本能的に恐怖していた。
「ど、どうするんですか？……」
天田の問い掛けに誰も答えない。答えられない。エリザベスはこのデーモンと戦う為ここに来たと言っていたが、アイギスらにとってあまりにも想定外過ぎた。だが、ただ黙って見ている訳にはいかない。
「風花さん。アナライズお願いします」
『は、はい。了解です。分析してみます。少し時間をください』
このままではみんなの心が折れる――。アイギスがそう危惧した瞬間であった。
「風花さんっ！！」

デーモンの口が開く。見えたのは血よりも赤い口内。鋭い白牙。黒い舌。そして力の高まり。アイギスは一瞬体を沈め下肢に力をこめ、爆発的な速度で風花へと向かう。吐き出される火炎球。直線上には風花が立っていた。

『え？』

風花のペルソナ、アルカナ女教皇　ユノは情報収集、分析に特化したペルソナだ。通常は後方に待機し、遠方から解析した情報やシャドウの性質を前線で戦うメンバーに報告する。重要な作戦行動時は前線メンバーが視認出来る位置で後方支援を行う事もあったが、戦闘に加わる事は皆無。だからアイギスやゆかり、伊織や天田には、風花が攻撃されるという発想はこれっぽっちもなかった。アイギスは火炎系スキルを吸収出来るペルソナ、ウリエルに付け替えつつ風花の元へと急ぐ。風花に迫る1メートルほどの火炎球は人間でも目で追える程度の速さ。到達時間を精査する。

＞山岸風花への攻撃到達予測時間。残り1．7秒。

＞山岸風花を突き飛ばす――　不可。↓詳細。

＞山岸風花の盾となる――　不可。↓詳細。

＞スキルで相殺する――　不可。↓詳細。

＞推奨対応。審判　ルシファーの治癒系スキル　メシアライザー使用。被弾した山岸風花の回復を試みる。

風花の防御力に賭ける気はさらさらない。かといって庇う手立ては候補に出ない。だが、間に合わないと返されてもアイギスは足は止めず全力で風花の元へ駆け寄る。ペルソナをルシファーに付け替える事以外で今出来る唯一の事だった。火炎球が風花に近づく。恐怖に引きつる風花の表情が見えてしまう自身のカメラの性能がこの時ほど疎ましい思った事はない。その時、カメラに影が映る。

「ペルソナっ！」

朱色と黒のボディ。無駄の無いシャープなシルエットに長い手足。黒い大きな球体が肩となって回っており、銀の帯がまるでたすき掛けのように二本左右から伸びている。時の流れと共に回る星の車輪、

黄道を司る女神。天田のペルソナ、アルカナ正義　カーラ・ネミが現れ、間髪を入れず魔法反射の防御スキルランク7、『マカラカーン』を発動する。

キィン、と甲高い音が迷宮内を反響する。火炎球が天田の張った結界、マカラカーンの防御壁に食い込んだ。マカラカーンは一度魔法を反射すると消えてしまうが、物理系統のスキルや万能系以外は全て跳ね返すという極めて強力なスキルだ。放たれた火炎球は術者であるデーモンに向かって反射される。はずだった。

「な、に！？」

跡形もなく消え失せた火炎球。そして。軋む音と共に粉々に砕け散るマカラカーンの光り輝く防御壁。

「そ、そんな！　マカラカーンが反射出来ずに砕け散るだなんて！」

天田の驚き。アイギスですら実際にカメラが捉えていたにもかかわらず受け入れるのが困難な現象だった。予想外過ぎる。今までの戦闘経験が全く参考にならない。戦略が全く構築出来ない。アイギスとそして恐らく風花もだろう。砕け散ったマカラカーンを見て言葉にならない衝撃を受けていた。

「アイちゃん、オレッチが行く！　ゆかりッチ援護頼む！」

伊織の怒鳴るような声と共に全員の足下から紫の光が天を突くように伸びる。一定期間魔法防御力、物理防御力が上昇する補助スキル　ランク5、『マハラクカジャ』を掛けてデーモンに向かって伊織は駆け出す。

ゆかりは左手から黄金の弓を出す。まだ冷静さを取り戻しきれていないようだが、これまで培った戦闘経験が流れるような動作を実現しているのだろう。ゆかりは矢を引き絞った状態からわずかに弦を戻し、そして矢は離れた。光の矢は空気を切り裂き黄金の線を描く。鏃（やじり）は寸分の狂いもなくデーモンの額へ向いている。だが矢が刺さる事はなく、デーモンはまるで虫でも払うかのように左手を軽く振ってはたき落とした。意識を伊織から離すのが目的ならば上々だ。

「いっくぜっ！　トリスメギストス！！」

矢がデーモンに到達した時を見計らうように伊織のペルソナ、トリスメギストスが迷宮の中空に姿を表す。金色なる一対の翼が一度の羽ばたきで生み出す刃は三。三対の翼が羽ばたく事三度。都合二十七の刃がデーモンを含む周辺全てを斬る。広域斬撃系スキルランク8、『空間殺法』。刃の弾幕がデーモンを襲う。

アイギスは刃がデーモンに触れる瞬間に全センサーを向け集中する。二十七の刃は迷宮の壁を斬り床を斬り空を斬る。広範囲スキルゆえ全てがデーモンにヒットするわけではないが、五刃目がデーモンの肩を斬った。続いて七刃目が腰を斬る。十一刃と十三刃目は腕を、十八刃目は胸を斬った。二十刃目は再び腰を斬り、二十六刃目は首元を斬った。

センサーは七回の斬撃をしっかりと捉えていた。解析の結論は損傷なし。斬った瞬間、僅かに赤い線が走るがそれも直ぐに塞がる。血は流れずダメージを負っている様には見えない。だが斬撃が全くの無効という訳ではないようで、恐ろしく耐久性のある表皮であると推測できた。より強力な斬撃ならば効果はあるだろうと結論付ける。

物理攻撃への耐性が高いならば、魔法スキルならどうか。火を吐くのならば火への耐性がある可能性が高い。では氷結だ。

アイギスはアルカナ女帝　四大天使が一人、ガブリエルを召喚する。右手に剣を。左手に百合の花を。「神は力強い」と意味する名を持つ大天使は長い髪をなびかせ、デーモンを見据える。

迷宮内の壁が、床が白くなっていく。先ほどとは打って変わって温度が低くなり、吐く息が白くなる頃にはデーモンは氷の彫刻と化していた。全ての動きを減速させていく静かなる攻撃、氷結系最強スキル、『ニブルヘイム』。迷宮は目に見える全てが凍る真っ白な世界へと豹変する。今や不用意な息の吸い込み方をすれば肺が凍傷になりかねない寒さとなっていた。

「風花さん、アナライズ結果はどうですか？」

氷の彫刻が音を立てひび割れていく中、アイギスはわずかに出来

た時間的余裕を風花との会話を選んだ。アナライズ結果が分かっているのと分からないのとでは戦略に大きな違いが出てくる。ペルソナ使いがシャドウと戦うにあたり、アナライズをして敵の属性、弱点をまず確認するのは戦闘における基本といえる。

『そ、それが全く分からないの。敵の名前もステータスもレベルも属性も。何も……分からないの！』

「何も、分からない！？」

あまりにも未知の相手だからだろうか。圧倒的に相手が格上だからだろうか。シャドウにはアナライズ出来てデーモンには出来ない。ペルソナ使いにはアナライズ出来てデーモンには出来ない。エレボスにはアナライズ出来てデーモンには出来ない。共通点はなんだ。アイギスは情報をかき集め、データプロセッサーにアンサーを求めた。

＞人間。

即座に返ってきた答え。敵が人間に由来するモノではないからではないか、という推測。言われてみればシャドウは人から生まれし異形。ペルソナ使いは当然人間である。エレボスも人の悪意。どれも人間が関連している。風花のペルソナが対ペルソナ、シャドウ用の情報分析特化型なら相対するデーモン相手にアナライズ出来ないのも納得の理由だ。

なんであれアナライズ無しで戦うしかない。アイギスはそう決心すると今ある情報で戦略を構築し直し声に出す。

「氷結系は一定の効果あり。電撃、疾風は未確認。火炎系は避ける。物理攻撃は可能な限り高ランクな物を使用の事。火炎球による遠距離攻撃確認。近接攻撃打撃系の存在を推定。マカラカーンによる反射は危険性考慮。動きは相当素速い事を考慮。以上の情報で戦略を構築し直します。ゆかりさん、疾風系を試してください。順平さん、斬撃で攻撃しつつ適宜マハラクカジャを。天田さんは風花さんを護衛しつつ適宜回復魔法をお願いします。風花さん、いざという時の為、エスケープロードの準備を」

指示を出し終え、アイギスはアルカナ愚者　スサノオへペルソナをチェンジし召喚する。
「くれぐれも安全第一で。ヒットアンドアウェイを心掛けてください」
アイギスの足下に炎のような赤い力場が生まれ、赤い光が揺らめき細かな光の破片を辺りに飛び散らせる。補助系スキルランク４『チャージ』。物理攻撃の威力が倍増する。
「行きます！」
現れたのはスサノオ。右手に持つ八岐大蛇（ヤマタノオロチ）の尾から出てきたといわれる天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を、一刀のもとにデーモンを真っ二つに断ち切らんばかりに振り下ろす。斬撃系最強と名高いスキルランク7、『天軍の剣』。チャージで強化された一撃はデーモンの左肩から右腰に掛けて切り裂く。伊織もそれに続いた。トリスメギストスが放ったのは『ブレイブザッパー』。狙ってなのか偶然なのか、天軍の剣の一撃をなぞるように同じ箇所を切り裂く。
「ペルソナっ！！」
ゆかりの声と共にマリアはマハガルダインを放つ。緑に輝く幾つもの風の刃は奔流となり、激しいうねりとなってデーモンをねじ切らんばかりに押し寄せる。
無効化はされていない。反射も無い。デーモンの苦しむ姿をみる限り、疾風属性の耐久も無いと判断して良い。アイギスは敵の情報構築をなおも進めながら注意深く次の手を練る。
マハガルダインの嵐に耐えきり、怒りの咆哮を上げながら伊織へと近づくデーモン。無造作に左手を真横に振り攻撃するが、伊織は両手に持つ剣で攻撃をしっかり受け止める。一定期間防御力が上がるマハラクカジャの効果は依然続いており、いつもより防御力が上がっているのはなんとも心強かった。デーモンを見ながらアイギスは次の一手をどのようにするか、少ない手札の中から何度も高速シミュレーションをしながら慎重に素早く検討する。
『じゅ、順平くんっ！？　いやぁぁぁぁっ！！』

響く風花の悲鳴。アイギスは驚き風花へ視線を向け、次いで伊織へ焦点を合わせた。血の気が引く、と表現しても差し支えない衝撃がアイギスに走る。

床に血溜まりが出来ている。伊織の右肘から下が切れかけていた。先ほどの攻撃は防いだのではなかったのか、と疑問が沸き起こるが結果を見ると防ぎきれなかったのは明確だ。デーモンは容赦なく痛みに耐える伊織に叩き潰すかの如く拳を振り下ろす。一条の銀光が走る。ごとり、と床に落ちる鈍い音。

「へ、へへ……バッティングの基本。右手は添えるだけ、ってな」

青ざめる伊織が振るった左手一本での一撃。綺麗な弧を描いた白銀の刃はデーモンの右手を斬り落とした。床に転がる赤黒い腕。無くなってしまった右腕を突き上げ、デーモンは地響きのような絶叫をあげた。伊織は咆哮に押されるようによろよろとふらつき、壁際まで下がるとそのまま床へずるずると座り込む。血が足りないのだろう。目はやや虚ろになりつつも懸命に食いしばる表情を見せる。状況を考えると、さっきの一撃は奇跡とも言える一太刀だった。デーモンは座り込んだ伊織を睨むと、まさに悪魔の如き形相で獣さながらに襲いかかる。

「順平さん、危ないっ！」

天田は伊織の腕を気遣いつつも体当たりし、順平を突き飛ばす。鋭い爪は黒のダウンベストを引き裂き、オレンジのパーカーを破り、赤い飛沫をあたりに散らす。

「お、おい！　天田！　天田ーーーっ！！」

ほとばしる鮮血。伊織は必死で床に伏す天田を呼びかけるが全く反応がない。背中からはどくどくと赤い血が流れていた。風花の悲鳴が響く。ゆかりは右手に持つ召喚器の引き金を引いた。

一人、また一人重傷を負っていく様を見て、アイギスが焦りとも狼狽とも取れる表情をしている事に誰も気が付いていない。

先にある通り、伊織も天田も人間という枠組みならその強さは一線級だ。戦闘技術という面で見るなら訓練を重ねた軍人に軍配は上

がるだろうが、単純な戦闘力という事なら機械の乙女であるアイギス相手に戦う事すら出来る。なのに全く太刀打ちが出来ないこの状況。ここに足を踏み入れてまだ十分ほどしか経っていないのに、既に全滅寸前まで追い込まれている。アイギスは撤退を決意した。

すぐさまガブリエルを召喚し、ニブルヘイムをもう一度放つ。極低温の一撃は致命傷を与える事は叶わないが足止めなら出来る事が分っている。だが、それはデーモンがまともにニブルヘイムを喰らった場合の話だった。

冷気が辺りに漂った瞬間、デーモンは口から火炎球を打ち放つ。それは一発では終わらなかった。二発、少し遅れて三発と立て続けに火炎球が吐き放たれる。ニブルヘイムは向かってくる火炎球を一瞬で飲み込み、なおもデーモンへと襲い掛かるが確実に威力は弱くなっていた。冷気と共に立ちこめる水蒸気。火炎球を飲み込む蒸発音がまるで悲鳴のように響く。デーモンは自身が氷漬けになる寸前にもう一発火炎球を吐き、ニブルヘイムは薄皮一枚凍らせる程度の威力まで相殺されていた。

アイギスは審判　ルシファーへチェンジし、より攻撃力の高いスキルを使おうと集中した。ペルソナの姿を思い浮かべ、そして意識を鋭く尖らせるように集中する。例えるなら小さな針の穴にほつれ気味の糸を通す瞬間。かちりと重なり合うと双方に力が流れ、行き来し、もう一人の自分であり困難に立ち向かう仮面(ペルソナ)はこの世界に現れる。

意識の集中は一瞬でその隙はわずかだった。デーモンはアイギスへと一足飛びに近づき、左手でアイギスを横殴りにする。壁までダイレクトにぶっ飛ばされるアイギス。警告音に従い、咄嗟にガードをしたので致命傷とならずにすんだが、それでも意識下では損傷を知らせる様々な警告音がなり続く。一撃が致命傷、一撃がでたらめな威力だ。

アイギスは飛ばされた衝撃でなかなか焦点を合わせる事が出来ないカメラを必死で動かし追撃に備える。だが、追撃予測時間を越え

てもデーモンからの一撃はこない。焦点が合わないカメラでの確認を諦め、温度センサーを索敵モードに切り替える。
最悪だった。デーモンにも体温がある事を確認したまでは良かったが、大きな体の持ち主は女性一人、男性二人の方向へと進んでいる。
「私が！！　相手ですっっ！！！」
アイギスは照準を自動（オート）に切り替え機関銃をデーモンに向かって発射する。倒す、というより意識をこちらに引き付ける為の攻撃はすでに乱射と言って良いほどだ。銃口である指先は発射熱で赤熱化しはじめ、木に触れたなら燃え上がるほど熱くなっていた。だが、そんなアイギスをあざ笑うかのようにデーモンは伊織と天田に回復スキルを施しているゆかりへ近づいていく。いつしか銃撃音よりも大きなアイギスの叫びが迷宮に響く。
「メギドでございます」
ぼそりと呟く声。光と力が収束し僅かな溜めとも言える無音の後、アイギスの集音機構が壊れんばかりの爆発音が響き渡った。決して欠ける事の無かった迷宮の床が破片となり次々に宙を舞う。爆発音はやがて断末魔となり、それは静寂へと繋がっていった。
アイギスは後ろを振り向く。左手に一枚のカードを持つエリザベスがアイギスに向かって深く頭を下げる。
「真剣勝負に水を差す真似をして申し訳ございません。ですがこれ以上は命に関わると判断いたしました」
「はい」としか答えられなかったアイギス。伊織や天田、それにゆかりが無事な事を喜び、二人を守れなかった無力さをかみしめた。

００６：別世界の現（後書き）

改稿：２０１１　１０／２９　２３：４５
負けっ放しでは暗いかなと思いアイギスの勝利で投稿しましたが、読み直すとどうしても違和感をぬぐえず、当初書いていた結末に差し替えました。
ポイントを入れてくださった後に結末の差し替えをしてしまい、誠に申し訳ありません。

００７：分岐点の一

ゆかりの通う大学正門前に十四時待ち合わせ。それがゆかりと風花が交わした約束だ。きっと緑色の何かを羽織っているに違いない、とゆかりは想像しながら待ち合わせ場所へと歩いた。時折吹くやや湿気を含んだ風がゆかりの柔らかい髪を横へと流す。あの戦いからまだ十三時間しか経っていなかった。

正門に着くとゆかりの想像通り、緑色のカーディガンを羽織った風花が立っていた。だが想像とは異なり、風花の隣に立つ人影一つ。見た事のない男だった。ゆかりとアイギスに気が付いた風花は右手を小さく振る。

「ゆかりちゃん、アイギス！」

「ゴメン待った？」

「ううん。そんな事ない」

「……こちらは？　知り合い？」

どうせナンパの類だろうと思いながらも、風花の知り合いである可能性が０でない間はそっけない態度を取るわけにはいかない。軽く会釈をすると、男も嫌みのない笑顔で会釈を返す。

「知り合いというか……ゆかりちゃんたちを待っていたら声掛けられて。最初待ち合わせしてるのでって断っていたんだけど、お話が面白くてつい……」

「ついって……」

やっぱナンパじゃん、とやや呆れながら、ゆかりは件の男へ視線を向ける。白いシャツにジーンズ。背はやや見上げるほどに高く、一八〇センチはあるだろうか。細身ながらも筋肉質な体と短く揃えられた黒髪。少し日に焼けた肌は何かしらのスポーツをしているのだろうと想像させる。誰が見ても一定の評価をするであろう整った顔立ちに優しげな表情。第一印象はかなり良い。だが、ゆかりにと

って一番印象的なのは男の目だった。瞳の奥にあるなにかしらの強い意志。妙に力がある。あるいは自信なのだろうか。美鶴先輩にも似た光があるな、とゆかりは思う。

時間してはさほど長い訳ではなかったが、さすがにじっと見ていた事を無言の抗議とでも受取ったのか、男は申し訳なさそうな表情で左手で謝る仕草をする。

「あ、ごめん。ホントに待ち合わせだったんだ。まさかカメラや機械の話なんかでこんなに盛り上がると思わなくてさ」

どれだけ話し込んでいたのよ。てか何時から待ってたのよ、と心の中で思いつつも男の話題のチョイスに驚く。普通、女子相手にカメラや機械の話などしないだろうが、風花相手ならかなり効果的な話題だ。チョイスとしては文句なく正解。専門的な話題であればあるほど会話は盛り上がるだろう。ナンパ目的ならこの男、かなりの手練れだ。どうやって風花がカメラや機械が好きだと分かったのか知りたくなった。

「そうそう。大野さん、カメラとか機械とかすっごく詳しくて。それから神話の話になって……なぜか悩みの話になって……」

「で、心の強さって何？　って話になったんだよな」

「心の強さ？」

心の強さはペルソナの強さでもある。偶然とはいえ、ゆかりにとって喉から手が出るほど欲しい手掛かりだ。

「うん。心は体と違って突然目覚めるかのように強くなる事があるって。ほら、なんか思い当たるとこがあったからつい……」

「それで、結論はなんだったのでしょうか？」

「え？」

どうやらアイギスも強く関心を持ったようで、ぐいっと一歩前に踏み出て正面から男を見据えた。露骨に顔を引きつらせる男。一歩下がるとまではいかないが、上半身は完全に引いていた。

「心が強くなる、の話です。どんな結論なのですか？」

「な、なに？　なんでこんなに食い付いてくんだ？」

「聞きたいからです」
歪みないアイギスの返答に一瞬怪訝そうな顔を男はしたがそれもすぐ改め、さっきまでの優しげな表情に戻る。アイギスとゆかりを交互に見ながら男は身振り手振りを交え話し始めた。
「まぁ、かいつまんで話すと……決意した時、信じた時、信じ抜いた時、覚悟した時、受け入れた時。そんな時、人は強くなるもんだって話」
思い当たる。事件に父親が関わっているのではないかと疑心暗鬼になっていたあの頃。それを裏付けるような証拠が出たあの時。足下から全てが崩れ落ちたあの瞬間。それでも湊に「父親を信じ続けたらいい」と言われ、無我夢中で、まるで湊にすがるかのように父親の事を信じ続けた高校時代。確かにそう決めてからは不思議な事に悩みながらも前に進む事が出来た。信じるモノがあるというのは、なにか壁にぶつかったり岐路にさしかかった時、自らが進むべき道を選択する際の基準となる。それは確固たるものであればあるほど迷いは少なくなる。なるほど、確かに心が強くなる瞬間といえるかもしれない。
隣を見ればアイギスが、前を見れば風花も何かを思い出すかのように俯き、頷いている。ゆかりと同じく何かを思い出しているのだろう。一方、困惑したのは男だ。
「おいおい、なんだこれ？　なんでこんな真剣に聞いてんだ？　普通ならここは『何クサい事言ってんの？』って引くところだぞ？」
「まぁ、普通ならそうかもしれないですね」
あいにく普通とは少し違う。たった一年間とはいえ、結果的に世界を救う事となったほどの戦いに身を投じていたゆかりたちとって、強くなる事、信じる事、逃げ出さない事は恐ろしく身近な事だった。なにより十三時間前にぐらついたばかりなのだ。
「ふーん。なんかいい子だねキミら。いや、バカにしてるワケじゃねぇぞ？　噂と違ったというか、想像と違ったというか。って、まだ名前言ってなかったな。オレは経済学部三年の大野聖士（おおのせいじ）。よろし

くな」
一つ上か。いや、一つ以上年上かもしれない。大学という所は年齢と学年が必ず一致する場所ではない。ゆかりより年上である事だけは確かである。
「あ、すいません。私は……」
「知ってるって。岳羽さんにアイギスさんだろ？　有名人だからな」
じゃあ、また時間のある時にでも。笑顔でそう言い残して大野と名乗る青年は講堂に向かって歩いて行った。ナンパ目的で話し掛けておきながら、待ち合わせがあると分かったとたん会話を切り上げる。男の笑顔よりも話した内容よりもゆかりには好印象に映った。

思わぬところでわずかな時間をとってしまったが、ゆかり達は予定通りハイツの一階、集会室に向かった。到着するとドアの前に座っている天田の姿。あわててゆかりは集会室の鍵を開け、遅れた事を詫びる。集会室はがらんとしたもので、淡い茶色のフローリングにはロの字になるようにセッティングされた長テーブルと、八脚のパイプイス。それにスクリーンがあるだけで他にはなにもない。今はアレーテイアへと続いている扉もなかった。
「順平さん、携帯の電源切ってますね……」
一番出口に近いイスにすわる天田は携帯電話を力なく閉じ、ゆかりたちを見た。気怠そうに片肘をつき、数分ごとにため息をもらすゆかり。すぐ前にあるコーヒーカップからの湯気はほぼ背景に溶け込み、目を凝らさないとよく見えない。対面には背筋をピンと伸ばしたアイギス。グラスに注がれいるのはミネラルウォーター。どうやらまだ口をつけていないようで、透明なグラスの縁はミネラルウォーターと同じく日差しを受けきらきらと輝いている。風花は左にノートパソコンを、右にタブレットを置き、器用に両手で操る。その目は真剣。見ようによっては鬼気迫る、ともいえる。集会室正面と後ろに掛けられている丸時計の針は午後三時を二十分ほど過ぎていた。

「まぁ、時間過ぎてるし始めよっか」
一度背筋を伸ばし右へ左へと体を反った後、ゆかりは一同を見回す。反省会と今後の方針を相談しようと昨日の別れ際約束をした。結果だけみれば惨敗。全滅寸前のところを辛くもエリザベスに助けてもらった格好だ。だが、集まったものの特に対策は思い付かない。ゆかりからの力ない本音が開会の言葉となる。
「ほんっと、まじどうしよう……」
「強くなるしかありません」
アイギスはこの上なく真顔で正論を述べるが言われるまでもない。ゆかり自身も強くなるしかないという事は理解している。ただ、強くなる為には強敵と戦わなくてはならない。その強敵に勝てない。勝つ為に強くならなくてはならないという矛盾のループに陥った気分になり、なんとも打開し難い閉塞感を感じていた。
「ま、そうなんだけどね。エリが言ってた。昨日のアレはレッサーデーモンっていって、悪魔でも下級の部類なんだって。悪魔相手だとシャドウとは勝手が違うというか。悪魔が強いのかな？　それとも私たちが弱いだけ？」
放ったスキルだって最強クラスや上位クラスばかりなんだけど、とゆかりは独り言のようにつぶやくが、アイギスのセンサーは余裕でその小さな声を拾い上げる。
「そうですね……。弱いというかまだ足りていないというか。例えば同じガルダインでもゆかりさんが使うのと私が使うのでは威力が違うというのはご存じですよね？」
「疾風系増幅スキルを持ってるかどうかって事……じゃないよね？」
「はい。もちろん増幅系のスキルがあれば威力は増しますが、単純に威力を左右するのはペルソナ自身の魔力です。エリザベスさんがあの時放ったスキル、なんだか分かります？」
伊織と天田に回復スキルを施していたゆかりに迫った悪魔を屠った一撃。直前に感じたのは急速に高まり一点に収束する魔力。収束が限界に達し飽和した時、悪魔を巻き込み大爆発した。典型的な無

属性万能系スキル、メギド系の特徴だ。
「メギド系だよね？　あの威力ならメギド系最強の『メギドラオン』かな？」
「いいえ、メギド系下位の単なる『メギド』です」
「へ？　うそ！？　メギドであの威力！？」
「これはもうスキルランクの問題ではありません。単純な魔力量の問題です。私たちが操る『メギドラオン』は恐らくエリザベスさんの『メギド』と同程度。つまり本物の悪魔と戦うには私たちは魔力が足りていないのだと思います」
「魔力量の底上げって……ある意味上位スキル覚えるより大変じゃん！？」
　ため息と共に体中から力が抜けた。魔力は地道な鍛錬によってのみ上がる。だが筋力と違い、鍛錬を積めば必ず上がるというものではない。たとえ上がったとしても、ある日突然何かに目覚めるかのように上がる、というなんとも不確かな物だ。駆け出しの頃ならさておき、それなりのレベルに達しているゆかりたちにとって魔力量を上げるのはなかなかに困難な事だ。
「つまり地道な実戦の積み重ねこそが勝利への近道って事？」
「なんとも花の無い答えになりましたが、結局はそれが正解だと思います」
「あと二十九日。戦い続けるしか道がない、か……」
　ペルソナは行使すればするほど成長していく。より高いレベルで、より困難な状況でペルソナを召喚すればペルソナの能力は高まる。分ってはいたけど簡単にはいかない。ゆかりは改めて選んだ道の険しさを思い知る。少しぬるくなったコーヒーを一口飲み、物憂げな表情を浮かべながら背もたれに体を預けた。空気が重くなっていくのを感じる。淀んだ空気は周りに伝わり、動く者がいないなら空気は周りをも淀ませる。息を吐くだけなら空気は濁るだけ。行動に移さねば淀みが解ける事はない。ついには無言の時間が長くなり、風花のタイピングする音のみが響いていた。だが無言の時はそう長く

続かなかった。
「わりぃ。遅くなっちまった。携帯の電池なくなっちまってさ」
扉を開けるや、よく通る大きな声で場の空気をかき回す伊織。表情は明るく、いつも通りだった。順平さんらしいですね、とため息をつく天田の表情は緩んでおり、風花は分かりやすく笑顔だった。見る見る間に集会室の空気が緩やかになっていくのが分かる。
ひょっとしたらこないかもしれない。一瞬とはいえ頭に過ぎった事をゆかりは心の中で謝る。と、同時に伊織が来た事にホッとしていた。
「で、何？　話はどこまで進んだん？」
鞄をテーブルに置き、パイプ椅子の背もたれを前にどっかり座る。視線は自然、伊織に集まった。
「強くならなきゃね。でもどうしよっかってとこまで」
「戦って強くなっていくしかねーんじゃねぇの？　昨日はオレッチも天田も久々の実戦だったらからちょっとアレだったけど、そのうち勘取り戻すだろーし。そしたらちっとはマシんなると思うぜ」
天田の背中を叩きながら話す伊織。嫌がりながらも嫌そうじゃないという天田はなんとも器用な表情をする。
「死にかけたらエリちゃんがまたなんとかしてくれんだろ？」
「まぁ……そうかもだけど」
「ならいーじゃん。腕だってほら、この通り問題ないし」
取れかけていたはずの腕を曲げ、力こぶを見せる仕草をする伊織。エリザベスの治癒スキルには驚かされるばかりだ。
ゆかりたちに出来るのは傷の再生を速める事だけだ。あくまで治癒は傷を負った者自身の持つ治癒能力によって行われる。取れかけた腕を元通りに繋げる事も、無くなった腕や足を再生させる事も、ましてや死んでしまった者を生き返らせる事など到底出来ない。
「戦う。強くなる。んで湊を助ける。義務でも無理矢理でもなくってこれはオレッチの意志で決めた事だ。つか、湊を救って初めてあの戦いは終わるような気がしねぇ？」

「……だよね。うん、これを逃したらもう二度とチャンスないかもだよね」
「だろ。じゃあ決まりだ。つかさ、もうちょっと色んな方向から攻撃するようにした方がいいんじゃね？」
「それは確かにその通りです。以前に比べ使用スキルが広範囲高威力になった事により、味方を巻き込まないよう自然一方に集まるようになってきました」
「攻撃の組み立てをキチンと考えた方がいいって事ですか？」
「昨日のデータを踏まえて考えると……」
伊織の提案、アイギスの解説、天田の言葉に絶える事が無かったキーを叩く音が止まり、風花は自論を展開する。その様子を見てゆかりは思う。最初はエリザベスとアイギス、そして風花の四人でアイテールに挑むなんて大口を叩いておきながら結果はこのざまだ。
かつての戦いでは先輩である桐条が先を示し、同じく一年先輩の真田が周りを鼓舞し、リーダーである湊が切り開く。ゆかりたちはそれについていくだけであった。自分が無理でも誰かがなんとかしてくれる。そんな気持ちがなかったとは言い切れない。だが今は違う。自分たちがなんとかしないとなんともならない。先を示すのも鼓舞するのも切り開くのも自分たち。
「だからまず天田くんが先陣を切って、アイギスやゆかりちゃんのスキル攻撃で隙を作り、順平くんが斬撃というのが一番効果的だと……」
懸命に話す風花。よく考えたら昨晩の戦闘で一番ショックだったのは風花かもしれない。風花にとって後方支援はアイデンティティとも言える。いや、アイデンティティだった。高校当時、誰からも必要とされていない、何一つ自信のある事がないと思い込んでいた風花にとって、ペルソナによる後方支援、情報解析は他の誰も代わりを務める事が出来ない心の拠り所だった。少なくとも風花はそう思っていたそうだ。いくつかの出会い、理解、決心、別れと様々な出来事を経て成長した今、ペルソナによる後方支援のみをアイデン

ティティとして生きているとは思わないが、それでも戦闘における後方支援には少なからず誇りを持っていたはず。それがデーモン相手にまったく分析が出来なかったという結果はショックだろうと想像に難くない。

伊織は片腕が取れかかる重傷。天田も伊織を庇う際、背中を大きく抉られるという瀕死の重傷を負っている。アイギスだって攻撃を受けている。ダメージという点で見るとゆかりが最もマシだった事は明確だ。

「アイギス、ちょっと組み手しよっか？」

「え？　い、今からですか？」

「うん。今から」

何を落ち込んでいるのだろう、私は――

そこまで思い至った時、ゆかりはイスから立ち上がっていた。

ゆかりに続き、天田がアイギス相手に組み手を行っている時、ゆかりと風花、そして伊織らの話し合いの結果、アレーテイアは二日に一度のペースで挑戦する方針となり、アイギスと天田の同意を得て決定、反省会は解散となった。

間もなく日付が変わろうとしているが、エリザベスはまだ出掛けているようで部屋には戻っていない。アイギスは部屋でメンテナンス中。シャワーを終えたTシャツ姿のゆかりはリビングのイスに腰掛け、汗が引くのを待って化粧水をつけたコットンでぱたぱたと顔を軽くたたいていた。化粧水で肌を整えた後は、保湿成分や美白成分などが濃縮されたもの、いわゆる美容液の番だ。ゆかりは左てのひらに美容液を取り、しばらく眺める。別に見るのが目的ではない。人肌になるよう温めているだけだ。

突然、世界は色を変える。灯りは消え、音楽は止まり、窓の外から黄色の光が差し込む。影時間だ。ゆかりの手は一瞬だけ止まった

が、何事も無かったかのように美しく張りのある白い肌に美容液を塗り始めた。あごの下から耳の方へ。下から上へ、中央から外へ。てのひらと指の腹を器用に使い、顔全体に塗っていた時、アイギスの部屋のドアが開く。
「ゆかりさん、シャドウです。場所はそう遠くありません」
「そっか。了解」
ドアが開いた時、うすうすそうかなと思っていゆかりは仕上げとばかりに両頬を軽くてのひらで叩く。手早く髪をくくると玄関先に引っかけていたチェックのパーカーを掴んだ。

車は停まり、信号は消え、動いていたモノが全て止まる世界。道には大きな柩が立っており、所々に血溜まりが出来ている。影時間は時間そのものが止まるため、認識出来ない人にとっては存在しない時間帯だ。空を飛ぶ飛行機は暗闇のなか動きを止め、注がれたビールはその瞬間を切り取られたように固まる。物音を発する存在が無い為、影時間適性者以外から出る音以外は存在しない無音の世界。そんな中、黒い青緑色が覆う道を駆ける二人の女性。
「っ！？」
隣を走るアイギスが突如驚きの表情を見せる。常に冷静なアイギスの表情をここまで変えさせる出来事が起こるとは。ゆかりはアイギスの口から出てくるであろう良くない知らせに対して覚悟する。だが、アイギスの口から出てきたのは意外な言葉だった。
「シャドウ反応……消滅？　逃げたのではなく、消えたようです」
消失（ロスト）ではなく消滅。この場合、誰かがシャドウと戦い、勝った事を意味する。
「どういう事？」
「詳細は分かりません。言えるのはシャドウが消滅したという事、だけですね」
風を切る音が心なしか激しくなる。灯りのないコンビニエンスストアを過ぎ、同じ造りの建て売り住宅街を通り抜けた先、目指して

いた四丁目七番と十五番に挟まれた細い通りに着いた。動くモノは見えず。だが倒れている人を見つけゆかりは駆け寄る。
「あれ、この人……どっかで見た事あるような……」
「確か一ヶ月前にシャドウに襲われていた人ですね」
そうだ。シャワーを浴びていた時に影時間が来た時の人だ、とゆかりはもやがかかっていた記憶が鮮明になる。
仰向けに倒れているグレーのスーツを着た男性。目立った外傷は見受けられないがシャドウに襲われ影人間になった可能性もある。だが、どうやら単に気絶しているだけのようだった。調べ終わったアイギスは男をそっと壁にもたれかけさせる。
「これってどういう事？」
「状況を見る限りでは、この男性を含む誰かがシャドウを倒したのではないかと推測できますがなんとも……」
ゆかりは辺りを見るが、地面が抉(えぐ)れる、壁が傷つくなど目立った戦いの痕跡は見つからない。スキルを使えばなにかしらの残滓(ざんさい)が残るが、それを感知出来るのは風花だけだ。ゆかりとアイギスに出来るのはせいぜい辺りを注意深く見回す事だけだった。
「どうする？」
「センサーに反応はありません。シャドウに襲われる危険は去ったので、帰還してもよいと判断します。一応この男性の身元情報も集めましたので、後で桐条のデータベースで照合しましょう」
「そう……だよね。じゃあ戻ろっか」
物音一つしない眠る町。いつもと違う薄気味悪さを覚えつつ、ゆかりたちはこの場を後にした。

影時間が明け、時が再び刻みはじめた午前〇時〇〇分十五秒。世界にとっては日付が変わってまだ十五秒だが、ゆかりたちの体感時間としては一時間を超えていた。
アイギスはハイツに戻ると早速倒れていたサラリーマンの情報を桐条グループのデータベースに送信する。午前〇時〇一分三十一秒。

照合結果が送られてきた。
　速いね、とゆかりは呟いたが何の事はない。男は桐条グループ系列会社の子会社である桐条セレモニーという葬儀社の社員だった。
「桐条グループって葬儀社もあったんだ……」
「とりあえず美鶴さんに報告しておきました。二度も襲われるという事はあの男性、影時間への適性があるのでしょうね」
「あ、やば。だったら私たちの事覚えてるかも？」
「確かにその可能性はありますね。それも合わせて報告しておきます……」
「……？　どうかした、アイギス？」
　言った後、ゆかりの耳に階段を登る音が微かに聞こえてきた。深夜にここの階段を登る人物で思い当たるのは一人。もしそれ以外なら様々な意味で敵である可能性が高い。ゆかりはやや緊張を孕んだ視線をアイギスに向けるがアイギスは微笑み頷いた。
「エリザベスさんが帰ってきましたね」
「あ、やっぱそう？　ったく。ホントエリは自由奔放というかなんというか……」
　なかなか帰ってこないエリザベスを心配していたゆかりは玄関へ行き、扉を開ける。暗がりの中、蛍光灯に照らされているエリザベス。ちょうど階段を登り終えた所だった。
「あら。こんばんは、ゆかり」
「こんばんは。って、こんばんはじゃないっての！」
「あら？　確かこちらの世界では夜の挨拶は『こんばんは』だと記憶しておりましたが……申し訳ございません。では改めまして。おばんどす、ゆかり」
「いや、なんで京都弁？」
　相変わらずのマイペースっぷりに出鼻を挫かれた感があったが、ゆかりはエリザベスの足下からゆっくり見上げていく。青いロングブーツ。ひざが僅かに見えた後、すぐに青いワンピースの裾がある。なだらかな曲線を描き、その上のラインは細くくびれたウエストへ

と続く。光の加減だろうか、右の腰あたりが少し破れているようにも見える。
「てかちょっと聞きたいんだけど。エリってさっきあっちの方にいた？」
ゆかりは右手で先ほど男が倒れていた方向を指さす。なんともアバウトな聞き方だが、詳しい町名や番地が分からないであろうエリザベスには効果的な聞き方かもしれない。
「あちらとは……ゆかりが指さす方角でございますか？　であるのでしたら私はそちらには行っておりません」
「そっか。じゃあシャドウを倒したのエリじゃないんだ」
「はい。そちらの方角ではシャドウを倒しておりません」
「うーん。一体誰なんだろう……」
「なにかあったのですか？」
「うん。まぁちょっとね。　あ、そだ。明日朝ご飯食べに来る？もし来るならその時にでも話すけど？」
「はい。是非ともお伺いしたく存じます」
「じゃあ明日の朝七時に」
「承知いたしました」
「それじゃあ、おやすみ」
「おやすみなさいませ」
二〇三号室へ入るエリザベス。当初は戸惑いながらの解錠だったが流石に慣れたようで、ポケットからカードキーを取り出し扉を開け、部屋へと入っていく動きは実にスムーズだった。
「誰がシャドウと戦ったんだろう……」
再び静寂が戻る。エリザベスを見送ったゆかりは誰もいない廊下で小さく呟いた。

００７：分岐点の一（後書き）

追加投稿：２０１１　１１／１１　２：２５
さっき、番長が『ないわ……』って言ってました（笑）

００８：聖母の微笑

岳羽ゆかりは有名人だ。月光館学園高等部では恐らくゆかりを知らない学生はいなかっただろう。さすがに高校とは比較にならない多くの学生が在籍する大学ではゆかりを知らない人はいるだろうが、それでもアイギスとの美人二人組として相当目立った存在だ。

明るい栗色の髪に大きな黒い瞳。整った鼻筋に続くのは淡い桃色の唇。化粧は薄めでナチュラルメイクだが、妙な色っぽさも同居している。親しみやすく気取らない性格、けれどどこかミステリアスな雰囲気も併せ持つという相反する存在感は男子のみならず女子からも人気がある。けれど、ゆかりは決して特定の誰かと付き合う事はなかった。

高校時代は付き合う事で自分が女である事を思い知らされるのを恐れて。

大学生になってからは、どうしても一人の男を忘れる事が出来なくて。

転校を重ねたゆかりが月光館学園にやってきたのは十二才の頃。中等部に在籍と同時に寮生活を始めた。その理由は『母親から離れたい』。

ゆかりの母、岳羽梨沙子（たけばりさこ）は桐条の名士会に名を連ねる良家の出で、夫とゆかりと三人、何不自由なく幸せに暮らしていた。

だが、とある出来事が全ての運命を狂わせる。二〇〇〇年、辰巳ポートアイランドにあった桐条グループの研究所が謎の大爆発を起こす。その被害は甚大で、数多くの死者を出した。子は動かない親にすがりただ泣き続け、さっきまで手をつないでいた人は引き裂かれ、いなくなる。影は飛び散り破片となった。まるで戦争でもあったかのように街は見渡す限り灰燼（かいじん）と化した。辺りは混乱極まり、様々なサイレンが鳴り響くが、救助どころか辿り着く事さえ困難な有

様だった。
事故から数日。まだ多数の行方不明者が見つかっていない中、テレビや新聞、ラジオはこの悲惨な事故の首謀者として一人の男の名を連呼し始めた。男の名は岳羽詠一朗（たけばえいいちろう）。事故が起きた研究所の優秀な主任研究員であり、ゆかりが敬愛してやまない父だった。だが、彼が事の顛末を世間に話す機会は無い。なぜなら彼は爆心におり、一番初めに死んだ人物の一人だからだ。
責任は全て岳羽詠一朗にあると流された。爆発を起こした悲劇の研究所がどんな実験をしていたかも知らないまま、人々はメディアに踊らされ詠一朗とその家族を叩きだす。ゆかりが七才の時だった。
まだ幼いとはいえ、この事故に父親が関係していて、そのせいで世間から責められているのは理解でき
た。だけど大好きだった父親が悪い事をするなんてゆかりには考えられなかった。
みんな何か勘違いしている。きっとお父さんは悪くない事を分かってもらえるはず。そう信じていた。だけど世間は甘くなかった。
学校では虐められ、帰宅途中では心ない住人の視線に晒され、家に帰ったらニュースキャスターが含みを持って岳羽詠一朗の名を口にする。誰一人としてゆかりの味方をする者はなく、ゆかりとその母親は来る日も来る日も世間から攻め立てられる。そんな二人に出来たのは、父親との思い出がいっぱい詰まった家を逃げるように引っ越しする事だけであった。だが移転しても数日もすれば以前と同じ状況になる。母親は耐えきれず、また別の地へと逃げる。もって数ヶ月。短い時はたった数日だけの我が家。二人は何度も何度も引っ越しを繰り返した。
それでもゆかりは必死で耐えた。
お父さんは悪くない。いつかきっと分かってもらえるはず。それに自分にはまだお母さんがいる。毎日が怖くて怖くて仕方ないけれどお母さんがいる。お母さんと一緒にお父さんの誤解が解けるその日まで頑張ろう。

そう懸命に耐えていた。
だが、母親は耐えられなかった。
良家の娘にはこの悪意を持った世間の荒波は激しすぎたのだろう。ゆかりは母親を支えに耐えたが、母親はゆかりを支えに耐える事は出来なかった。
母親は男に支えを求めた。
最初、ゆかりは家の中にいる見た事のない男が何なのか分からなかった。数日後、また見た事のない男が母親と共にいた。意味は分からなかった。だが言いようのない、とてつもなく強烈な嫌悪感を抱いた。大好きだったお父さんを裏切られた気分だった。
母親とは一緒にいたくないと思うまで、さほど時間はかからなかった。

中学生になってからのゆかりのモットーは『一人で生きていく』。誰にも頼らない。当然母親なんて頼らない。男になんて頼らない。私は一人で生きていく。そう固く心に決めた。月光館学園を選んだのは母体が桐条グループだからだ。『父親の身の潔白』を証明する為、なにかしら桐条グループとの繋がりが欲しかった。
『一人で生きていく』『父親の身の潔白』。この二つを原動力にゆかりは必死に頑張った。
そんなゆかりに一つ目の転機が訪れたのは高校生一年生の春休み。とある出来事がきっかけでペルソナ能力に目覚める。しばらくすると桐条グループの一人娘である桐条美鶴から一緒に活動しないか、と声を掛けられる。特別課外活動部への誘いは事件の謎に迫る事が出来る最大のチャンスだった。
二つ目の転機は高校二年生の七月。父親が事件を起こした張本人であるとの証拠を突きつけられる。ゆかりの中で何かが崩れた。
三つ目の転機は二つ目の十数分後に訪れる。特別課外活動部リーダー、有里　湊はゆかりに「それでも父親を信じ続けたらいい」と静かに言い放つ。初めてゆかりに父親を信じろと言ってくれた人だ

った。
四つ目の転機は高校二年生の十月。湊を好きになっていた事に気が付いた。誰かと付き合う、誰かを好きになるという事は、女であることを否応無く実感してしまう。母親の、女としての部分に強烈な嫌悪感を抱いていたゆかりにとって、それはたまらなく嫌な事であった。だから、湊を好きになっていると自覚した時は相当驚いた。
五つ目の転機は高校二年生の十一月。いままで父親が張本人だと決定づけていた映像が、実は意図的に改竄されたデータだと風花が気付き、真実を明らかにした。父親は悪くなかった。むしろ最悪の事態を避ける為、自らの命を犠牲にして世界を救っていた。死の直前、口にしたのはゆかりの事だった。
六つ目の転機は高校二年の三月。湊が死んだ。母親の気持ちがやっと理解できた。だけど他の男を求める事だけはしない、と心に固く誓った。
七つ目の転機を経て深い悲しみからなんとか立ち直り、前を向いて歩きだして数年。訪れた八つ目の転機。
アレーテイアに挑戦すること四回。攻略階層は未だ一階。シャドウが現れては苦戦し、レッサーデーモンが現れては全滅寸前まで追い込まれ、最後はエリザベスに助けてもらうのがパターンになっていた。なかなか結果が出ないこの状況はゆかりの想像以上に重くのしかかる。アイギスに「最近ため息が多いですよ」と言われるほど、最近のゆかりは精神的に追い込まれていた。

梅雨入り宣言の後、毎日のようにしとしとと降っていた雨も昨日から止んでいた。梅雨の中休みなのかもしれない。日差しはまだまだ夏を思わせるほど強くはなく、外は妙に蒸し暑かった。
久しぶりの晴れ間を外で満喫しようと思っているのだろう。カフェ内はまだまだ空席が目立つがテラス席はほぼ満席だ。ゆかりと二人の友達もご多分にもれず、晴れ間を満喫しようとしているグループの一つだった。

「はい」
「あ、ありがと。ちょうど欲しかったんだ」
赤い服を着た女はゆかりからペーパーナプキンを受け取る。それを見ていた隣に座るベージュの服を着た女は足を組み直し、小さく感嘆の声を漏らした。
「流石はゆかり。やっぱモテる女はよく気が利くってね」
「あーはいはい。どうせ私はモテないですよ」
「ペーパーナプキン渡しただけで大げさな」
友人達とのちょっと遅めの昼食。三人が注文したのは今日の日替わりランチであるエビのトマトクリームパスタ。トマトソースの赤にまぶしたパセリの緑がなんとも目に鮮やかだ。エビの数こそ少な目だが一尾一尾がなかなかに立派であり、味、価格を考えると十分お得感がある。以前に別のパスタを食べた時に思ったのが、塩加減がとても絶妙だという事。それ以来ゆかりはここのパスタが好きだった。
「今日アイギスさんは？」
「休み。ちょっと用事」
いつも一緒にいるアイギスがいない事を、友人はやはり不思議に思っているのだろう。そんな彼女らにとっては特に他意の無い一言だっただろうが、ゆかりには昨夜の出来事を思い出すのに十分な一言だった。
かつて伊織の腕に深刻なダメージを与えたレッサーデーモンの一撃。昨日はアイギスに直撃した。とっさに物理耐性の高いペルソナに切り替えたのが功を奏したのか、致命的な損壊には至らなかったがそれでも相当なダメージだった。
けれど収穫が無かった訳でもない。現場リーダーであるアイギスが戦線から離脱。指揮系統を失ったゆかり達は一時的な混乱状態に陥りかけた。それを瞬時に纏めたのが風花だ。すぐさまゆかりに弾幕代わりの広域疾風スキルを、天田には回復スキルを、そして伊織には天田とアイギスを守るよう矢継ぎ早に指示を出す。戸惑う事な

く流れるように動いた三人の連携も実際大したものだったが、やはり評価されるべきは素早く的確な指示を出した風花だ。
　レッサーデーモンには今回もアナライズが出来なかった。これの意味する事。それは対レッサーデーモン戦では、風花は何も出来ない、することが無いという事。ただ相手の特性や場の状況を伝えるだけではいけない。いざという時は状況を踏まえた作戦指示を出せるようになる。これがとりあえず風花なりに出した答えなのだろう。
　回復を終え、差し当たっての危機を回避した四人は事前のシミュレーション通りに作戦を展開する。天田が切り込み、ゆかりが弓で注意を引き付け援護する。伊織は白銀の大きな剣をどっしり構え、一撃に備えた。
　残像が出来るほどに素早く左右に切り返しながら接近する天田。レッサーデーモンが天田を意識した瞬間にはゆかりから飛び立った黄金の矢がレッサーデーモンの紅い眼を射貫く。間合いに入った天田はレッサーデーモンが左に重心を置いているのを確認し、左膝を外から薙ぐ。崩れるように倒れる巨体。そこへ狙い澄ました伊織の重い一撃がレッサーデーモンの腕へと食い込む。刃は弧を描ききるまで止まる事なかった。
　第四回アレーテイア挑戦結果。アルカナ戦車　洗礼の砲座二体殲滅。アルカナ女教皇　狂乱のマリア三体殲滅。アルカナ法王　白のシジル四体殲滅。そしてレッサーデーモンは腕二本、右眼、左膝と複数ダメージを与えたものの沈黙に至らず。最後は狡猾な攻撃の前に窮地に陥り、結局はエリザベスの一撃で幕を閉じた。
　初日に比べれば格段の進歩なのだがいかんせん目標にはほど遠い。知らず、ゆかりはため息をついていた。
「何、そのため息。ひょっとして……恋とか？」
「まじまじ！？　ゆかりって好きな人とかいるの？」
「えっ！　す、す、好きな人っ！？」
　身を乗り出しゆかりに迫る赤い服を着た女。ベージュの服を着た女は予想外の大物が釣れちゃったと目を見開かんばかりに驚いてい

る。にわかに活気づく二人。じめじめした空気を吹き飛ばす勢いだ。
「あらら？　適当に言ったんだけど図星なワケ？　ちょっと教えなさいよ」
「そうそう。誰？　私もその人知ってる？」
「誰って……その、二人の知らない人。高校の時の同級生」
「うわー、まじなんだ！！」
「何その恥ずかしそうな顔。すっごいかわいいんですけど？」
なんで私は湊君の事を隠そうとしていたのだろう。ゆかりはふと思った。もちろん、全人類を守る為に世界の果てで囚われている、などと言えるわけがない。けれど助けに行く為に動きだした今、二度と合えないかもしれないと諦めかけていた思い人から、会える可能性がある思い人となった今、もう黙っている必要などない。
私は湊くんを救う。そう、ゆかりは心の中で呟く。そして小さく息を吸い、二人に静かに言った。
「こっちを振り向いてもらえるように頑張ってるの。振り向いてもらえたら……二人にも紹介するね」

石造りの回廊。ほのかに光る壁。鼻につくすえた臭い。初日にエリザベスが砕いたはずの床はもうどこだったか分からない。この迷宮には自己修復能力があるらしく、数日もすれば砕けた箇所は何事もなかったかのように元に戻っている。
寒いか暑いかも分からず、風が流れているのかどうかも分からない。粘り気のある何かが纏わり付く感覚にはいまだ馴染めず、この迷宮にいるだけで何かを吸い取られるような錯覚さえ覚える。
「今日で五回目か。って事はつまり……」
「十日目って事ですね」
天田は伊織に目を合わせず答えた。一ヶ月以内で二十階まで辿り着く。すでに三分の一が過ぎている事に焦りを感じていない者はい

ない。けれど今日に限っては落胆一色でもなかった。
「でもさ。今日はラッキーなんじゃねぇ？」
にやりと笑う伊織。左手にもつ白銀の剣が光を跳ね返す。
「そうですね。初めてじゃないですか？」
天田は鎗を構えながらくすり笑う。
「千載一遇の好機。油断せずいきましょう」
風花は真剣な表情だった。気負いすら感じる程に。
「はい。私たちなら勝てるはずです」
アイギスも笑みを携えてはいない。彼女の碧い瞳は超高性能カメラのはずなのだが、しかし決意という一つの意志を宿して見える。
「今日は勝つ。絶対勝つ」
ゆかりは声を低く、自分に言い聞かせるように言い切る。左手から黄金色に輝く光の弓サルンガを出して虚空を睨んだ。空気が揺らぐ。風船が割れる瞬間を待つような緊張があたりを締め付ける。伊織は召喚器を右手に持ち、静かに引き金を引いた。
「いっくぜっ！　ペルソナァァァァッ！！」
全員の足下からマハラクカジャの紫光が伸び上がる。ゆかりはレッサーデーモンへと駆け出した。
「マハガルダインっ！」
致命とならずとも決して涼風ではない。視界を歪める程の烈風はレッサーデーモンの動きを著しく制限する。駆けるゆかりの右手が弦に触れた。
弓道において、弓を射る動作は八つの節――　射法八節で構成されている。すなわち「足踏み」「胴造り」「弓構え」「打起し」「引分け」「会」「離れ」「残心」。「足踏み」で的に向かって足を開き、「胴造り」で開いた足の上に体を静か乗せ身を整える。「弓構え」で弦に触れ、矢を番(つが)え、「打起し」で両手を上げるように弓を構え「引分け」で弓を引き、完成は「会」となる。「離れ」とは矢が放たれる事。そして「残心」は矢を打ち放った後の姿勢。弓の道を歩む者として一つたりとも飛ばせる過程はない。

走りながら弦に触れる。弓道を通して弓に触れてきたゆかりにとって、これはとても大きな事であり、言いようのない気持ち悪さと分かりやすい罪悪感がゆかりの心を捉える。

絶対勝つ。

心の中でもう一度呟くとゆかりは弦をしっかり掴み、「打起し」へと移行する。ゆかりの右指の先には三本の光の矢が現れた。すでに射程圏内にレッサーデーモンは入っている。後は、機を計るだけだ。そう思った瞬間、レッサーデーモンは空間を削るかのように距離を詰めてくる。慌てて後ろに飛びのくゆかり。レッサーデーモンはいやらしく口角を上げると、それまで全く見ていなかった左側へ雷の矢を打ち放った。

左にいたのがアイギスで良かった。それがゆかりの正直な感想だ。電撃耐性のあるペルソナへと付け替えたアイギスは大きなダメージを受ける事なく事なきを得る。視界の端でアイギスの無事を確認したゆかりはレッサーデーモンのすぐ目の前で弓を引いた。

「これでも喰らえっ！」

迷宮内に響くゆかりの声。迸る殺気。笑うレッサーデーモンはゆかりを睨み、そして右手で天田を払う。

「なっ！！」

ゆかりがレッサーデーモンの意識を引きつけ死角から虚を突くはずだった天田。完全に不意を突く事が出来たと確信した瞬間、レッサーデーモンは文字通り嘲笑いながら天田を払った。冷たい床に叩きつけられた天田。なんとか受身を取ったようだが、息が出来ないのか相当苦しそうだ。

「うおぉぉぉぉぉぉっ！！」

その天田を庇うように雄叫びと共に上段から斬りかかった伊織。だが、刃が届くその前に吐き出すように放たれた火炎球が伊織に直撃する。動こうとしたアイギスの足元に十を超える雷の矢が突き刺さる。レッサーデーモンは笑っていた。

「なんで……このレッサーデーモン……強すぎる……」

風花の絞り出すような声。エリザベスの右眉が僅かに動く。そして音もなくカードを一枚取りだす。エリザベスがペルソナカードを持つという事は、戦闘に介入する事を意味する。すなわちそれは戦闘の終了。

「まだ終わらせないっ！！」

勝ちたい。勝ちたい。勝ちたい。

戦いが終わってしまうという焦り混じりに召喚器を持った瞬間、ゆかりはふとももに熱を感じた。

「え？」

「ゆかりさんっ！！！」

アイギスの声が聞こえた時、ゆかりは自分の太ももに刺さった雷の矢を見た。電光をちりちりと踊らせ、ゆかりの白い肌を焼き焦がす。熱さはやがて鈍い痛みとなり、それは一秒ごとに鋭くなっていった。脈打つ血管に合わせるように刺すような痛みが、これは現実の物なんだと知らしめる。どんどん激しくなっていく痛みに顔を歪めながら、ゆかりは途中まで引きかけた召喚器の引き金を最後まで引いた。

現れたマリアから紡がれる癒しの光はゆかりの太ももを白く美しい肌へと再生させる。いや、再生出来る程度の攻撃だったのだろう。本来雷が刺さったなら、焼き焦げると同時に全身に致命的な電流が流れるはずだ。貫かれた痛みこそあれど、心臓が止まるほどの電流が流れていない事から推測するに、単に痛みを与えたいだけなのだろう。

ちらりとレッサーデーモンの顔を見てゆかりは確信した。ニヤニヤと笑う悪魔。ゆかりたちは間違いなく遊ばれていた。

「ふ、ふざけんなっ！！」

再び斬りかかる伊織。槍を繰り出す天田。アイギスは機関銃を撃ち続ける。最初に光ったのは伊織だった。次にアイギス。しばらくして天田の肩口が光る。薄暗い迷宮を照らしているのは不条理な雷の槍。三人を貫いた雷撃はあたりを煌々（こうこう）と照らしてい

た。
――　強すぎる。
アイギスが回復スキルを唱え、三人がなんとかその場から逃げるのを見ながらゆかりは呟いた。
――　どうしたらいいの。
召喚器の引き金を引く。聖母マリアはゆかりの背後にいつもの通り現れる。
――　助けて欲しい。
その時、これまでずっと背後にいたゆかりのペルソナ、マリアがゆかりの前に立った。
ゆかりを見つめるマリア。ペルソナが何かを嫌がっている。それだけはなんとなく分かった。不思議に思い、ゆかりはマリアに意識を集中させる。次第に繋がる心と意識。ゆかりからマリアへと一方的だった流れは、やがて双方向へと変わっていく。
――　何。何を嫌がっているの。
ゆかりの祈りにも似た問い掛けにマリアは静かに微笑む。明確な意志のやりとりはない。心に届くのは温かさと明るさ。そして鋭さと硬さ。声無き声で、言葉無き言葉で、身振り無き身振りでやりとり。それははわずかな一時。
ゆかりは目を開き、虚空を両手で掴んだ。
ばちばちと火花が飛び散る様な音がする。みしみしと何かを破る音がする。それらはゆかりの気合いと混じり合い、何かが溢れる瞬間の焦りを彷彿させる。
「ま、まさかっ！　こじ開けようというのですか！？」
「何？　ゆかりちゃんは一体何をしようとしているの？。」
驚きの表情を張り付かせるエリザベスに問う風花。離れた所から見ていてもゆかりが不可視の何かをこじ開けようとしている事は理解できる。問題は何をこじ開けようとしているかである。
「それは……」
言葉が詰まるエリザベスに対し、風花は珍しく先を促した。エリ

ザベスは知っている事と推測を交え話し始める。
　このアレーテイアは毒だった。ゆかり達が生命を維持するのは不可能な毒だった。ここの空気は肉体の成長を促す。促し過ぎる。それ故に毒。例えるならあまりにも大量すぎる栄養剤。過剰とも言える殺菌。死に至るほどの成長要素。筋肉が断裂するほどのトレーニング。わずか一分とここの空気に触れていたならば、それは数百人が成長出来るほどの濃密な要素に触れる事と同義である。
　エリザベスは濃すぎる空気を薄めるフィルターの役割と、純粋過ぎる空気に不純物を混ぜる役割を持ったフィールドをゆかり達に纏わせていた。ところがペルソナにまでアレーテイアの空気は影響していた。これはエリザベスにとって全くの計算外であった。
　エリザベスの作ったフィールドが召喚者を強固に守るかわりに重く重くのしかかり、その悪影響は全てペルソナへとまわっていた。弱まるペルソナの魔力。抵抗力。増える術者への負担。必要ＳＰ。ペルソナたちは本来の力を全く発揮出来きなかった。スキルを放てば放つほどペルソナは悪影響への抵抗とスキルを同時にこなし負担が激増する。その事があってか、無意識にゆかり達は武器による攻撃を選択する事が多くなった。
　ところが状況は変わり始める。
　アレーテイアに挑戦する事六日目。召喚者であるゆかりたちにこの空気による影響が出始める。召喚者の身体能力は底上げされ、鋭敏な五感を獲得する。それどころか五感を超える直感、第六感まで開き研ぎ澄まされた。
「どうやら第六感の開眼はペルソナに大きな影響を与え、いつの間にか私の防御フィールドが無くとも主である召喚者を守れるほどになっていたようでございます」
　エリザベスはやや自信なさげにそう付け加える。そしてこの時点で防御フィールドをもう展開しないでおこうとも思ったとも付け加える。結局、念の為十日間は展開しておこうと決意したのはほんの二十分前だ。

「あの淡く輝いているのが防御フィールド……」
風花はゆかりとその背後に立つマリアから迸る気勢と淡い光を見る。軋みは極点へと達し、見えない何かが粉々に砕け散る甲高い音が響く。内側から流れる力の奔流は弾けるように辺りに散らばった。
後に残ったのは呆然と立ち尽くすゆかり。レッサーデーモンはゆっくり近づき、舐め回すように無防備なゆかりを眺めた。
ゆかりはレッサーデーモンの左手を見た。振り上げられようとした左手はまもなく力が込められ、血管が浮き出始めた。やがて振りかぶりきった左手は一瞬止まり、ゆかりへと一直線に突き進む——ような気がした。
左に飛ぶゆかり。弓を出すと間髪を入れず矢を放つ。レッサーデーモンの左拳が轟音と共に床へと突き立てられた。けれど絶叫を上げたのはレッサーデーモンだった。寸分の違いもなく光り輝く黄金の矢は紅い瞳を貫いた。
目を押さえ叫ぶデッサーデーモンに回復を果たした天田が容赦なく槍を振るう。さらに重ねるように怒りの表情すら張り付かせている伊織の重い一撃。腹を斬られたレッサーデーモンはもう一度叫び、やたらめったら腕を振り回す。余程怒っているのか、さっきまでさんざん苦しめられている狡猾さは消え、愚直とも言えるほど力に訴えた単調な攻撃ばかりになっていた。当たれば大した威力であろう大振りの一撃を天田はひらりひらりと危なげなくかわしている。
レッサーデーモンの意識はほぼ天田に向いていた。そんな大きな隙を見逃すアイギスではない。十指に仕込んだ機関銃はレッサーデーモンへと撃ち込まれていく。伊織も火炎球やその他の遠距離攻撃に注意を払いつつ、じりじりと間合いを詰める。ゆかりはマリアを召喚し、手当たり次第に殴っているレッサーデーモンを眺めた。
『「ォォォォォオオォォォォオォォオオォォォォォオォォオォォオオッ!!!!」』
「なるほど、ね。確か全然違う」
レッサーデーモンの咆哮を涼しげに流し、ゆかりはマリアに呟く。

体が軽くなったというより心が解き放たれた気分。なんかテストが終わった後みたい、とゆかりは小さく笑った。鎧と同等の堅牢さを肉体が持ち得たなら、鎧は重く、動きにくく、視界を狭める邪魔物でしかない。

全く意識を自分に向けないゆかりに業を煮やしたか、レッサーデーモンは残った紅い眼をいよいよたぎらせ、大きく口を開ける。口元では火炎球がぐるぐると周り始め、高温により景色が揺らめいた。

「今度こそっ！」

火炎球がゆかりに放たれたと同時にマリアはマハガルダインを放つ。轟風にあおられ激しく炎が震え伸びる。けれどそれも瞬きする程度の間の話。強すぎる風に負けた炎は核となる部分を真空で切り裂かれ、螺旋を描くように翻弄される。そのまま風はレッサーデーモンを押し返す。

「そうよ、こんなとこで止まってなんていられない！」

ゆかりはもう一度マリアは召喚する。手に召喚器はない。だがマリアは即座に現れ、両手を組んで目を閉じた。緑の光と共にうねるのは天変地異の咆哮。大自然の驚異というにはあまりにも不自然な猛威。轟音は滞った迷宮の空気を揺るがす。およそ風が巻き起こす事が出来る破壊の凝縮、疾風系最強スキル『万物流転』。

迷宮に再び静寂が訪れる頃、レッサーデーモンは跡形もなく消えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1666i/

Episode Myself - Persona3

2011年11月22日03時12分発行